

<鴨下重彦ほか編『矢内原忠雄』を読む>

聖書の生¹⁾

——国立療養所大島青松園キリスト教霊交会という交流の場所——

阿 部 安 成*

石 居 人 也**

†

聖書は、たんなるキリスト教の聖典ではなかった。ときにその頁の余白に、それを使うもの、それをひとに贈るものによっていくつものことばが書きこまれ、聖書はそれを手にする人びとのつながりや意思やこころのありようをあらわすテキストともなる。

このことをわたしは、2009 年 9 月の国立療養所大島青松園（以下、青松園、と略記。所在地は香川県高松市庵治町。大島は島の名）調査時に、そこで出会った田中キャサリン（米国シカゴ大学日本文学部大学院博士課程。当時）から教えられた。教会にゆけばだれもがそこに聖書があると気づく。それらのいくつかを手にとれば、そこに書きこみがあることに気づくものもいる。わたしたちは、キャサリンの教示を得てあらためて、聖書を書史としてあつかい、その目録をつくることとした²⁾。

青松園には、1914 年に結成されたキリスト教信徒の団体であるキリスト教霊交会がある（以下、霊交会、と略記）。霊交会教会堂には図書室があり、その書棚には 2000 冊ちかくの図書が配架されている。蔵書には複数の聖書がふくまれ、それらは、装幀、発行者、

* 滋賀大学経済学部、** 町田市立自由民権資料館。

¹⁾ 本稿は 2011 年度滋賀大学研究推進プログラム「基盤研究」助成による研究課題「20 世紀日本の病の重層（complications）と生命観の文化研究」の成果の 1 つであり、すでに発表した阿部安成「島の書、書の園－国立療養所大島青松園をフィールドとした書史論の試み」（『国立ハンセン病資料館研究紀要』第 2 号、2011 年 3 月）の補遺の 1 つとなる。

²⁾ 書史については前掲阿部「島の書、書の園」参照。なおこのキャサリンからの教示以前にも調査時に気づいた聖書への書きこみにふれたことがある（阿部安成「長田穂波日記 1936 年－療養所のなかの生の痕跡」（2）『彦根論叢』第 373 号、2008 年 6 月）。

訳者がそれぞれに異なるさまざまなかたちの図書だった。2011 年 2 月から石居人由によつて始められた聖書の目録づくりが、2011 年 11 月に終わった。あらためて青松園にある霊交会教会堂の図書室と礼拝堂の聖書をみてゆくと、そのなかの 1 冊にいくにんもの署名を確認できた。『引照旧新約全書』（発行者英国人エフ、パロット、発行所大英国北英国聖書会社、1904 年発行、1908 年再版。No.40）³⁾を開くと、表紙見返しに続く扉のまえの頁に、

なんぢら立かへり静にせば救をえ・平穩にして依頼まば力をうべし・イザヤ三〇―十五／一
九三五 七月 富士山麓山中湖畔／イザヤ書研究記念／矢内原忠雄

とある書きこみに気づく。矢内原忠雄の揮毫だ。

「今年〔2011 年——引用者による。以下同〕は矢内原忠雄先生が世を去ってから五〇年になる」という（鴨下重彦ほか編『矢内原忠雄』東京大学出版会、2011 年。以下、本書、などとする）。すでに 2009 年に、東京大学教養学部創立 60 年を記念して、東京大学駒場博物館で「矢内原忠雄と教養学部」と題された特別展が開かれ、また、東京大学出版会が発行する逐次刊行物『UP』にも関連する稿が掲載され⁴⁾、複数の場で矢内原への追懷が披瀝されていた。そして、さきにその 1 文を引用した論文集『矢内原忠雄』が、東京大学出版会創立 60 周年記念出版として刊行されたのである。東京大学出版会のホームページで同書の案内をみたところ、「ハンセン病療養所伝道」という題がついた 1 つの節があることを知り興味を持った。11 月 2 日発行の同書を注文したところ、18 日に納品されてわたしの手元に届いた。読了ののち、27 日から本稿の執筆にとりかかった。

この小文は、霊交会教会堂にある数十冊の聖書を紹介するとともに、キリスト教への信仰を介した霊交会の人びとと矢内原との交流をたどり、矢内原と癩そしてハンセン病の療養所とを追懷するその仕方を検証するものとなる。（阿部）

³⁾ 聖書につけた「No.40」などは後掲の目録番号。

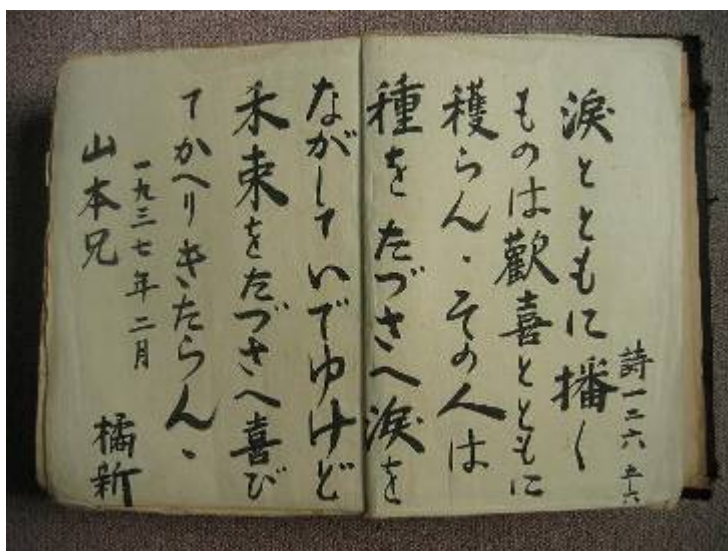
⁴⁾ 川中子義勝「矢内原忠雄―預言者の悲哀」（『UP』第 437 号、2009 年 3 月）、今泉裕美子「矢内原忠雄の遺した課題―戦後日本にとっての「国際関係研究」と「沖縄問題」」（同前第 439 号、2009 年 5 月）、鴨下重彦「矢内原忠雄とキリスト教―今なぜ矢内原なのか」（同前第 440 号、2009 年 6 月）。

†

2011 年 2 月から 11 月にかけておこなった霊交会教会堂の聖書調査で、わたしが眼にし、手にとった聖書は全部で 82 冊あった。このうち、11 月におこなった確認作業の時点で、1 冊 (No.2) が見当たらなくなっていたため、調査終了時点での確認冊数は 81 冊となる。ただ、いうまでもなくこの失われた 1 冊も、すくなくとも一度は眼にし、手にとっているため、後掲の目録には 82 冊を収めている⁵⁾。また、聖書の解釈・解説を本旨とする書については、今回の目録には収録していない⁶⁾。

いま試みに 82 冊を刊行年順に並べてみると、もっとも古いものが 1900 年、もっとも新しいものが 2007 年となり、その幅は 1 世紀を超えている。このうち、古い方から 5 冊は 1914 年 11 月 11 日の霊交会創設よりも前の刊行で、さらにうち 3 冊は療養所の創設以前の刊行になる。これらの聖書は、刊行後しばらく経ってから大島へ、霊交会へやってきたといえそうだが、これにかぎらず、ある場所に残されている書籍をみると、刊行時期を当該書籍の入手時期と判断することは早計だろう。もちろんそうしたケースもすくなくならずあるだろうが、霊交会の聖書の場合には、その聖書が、いつ、どのように入手されたのか、そしてそれを誰が、どのように読んでいたのか、といった経緯の一端を、書中に散見する書きこみからたどることができるものが含まれている。

さきの 5 冊でいえば、3 番目に古い『引照旧新約全書』(No.40) がそれにあた



⁵⁾ 聖書の表題は、表紙・背表紙・中扉・奥付のそれぞれで表記が異なっている場合が少なくない。そこで後掲する目録では、それらのうち極力当該聖書を特定しやすい表記のものを選び、表題欄に記している。

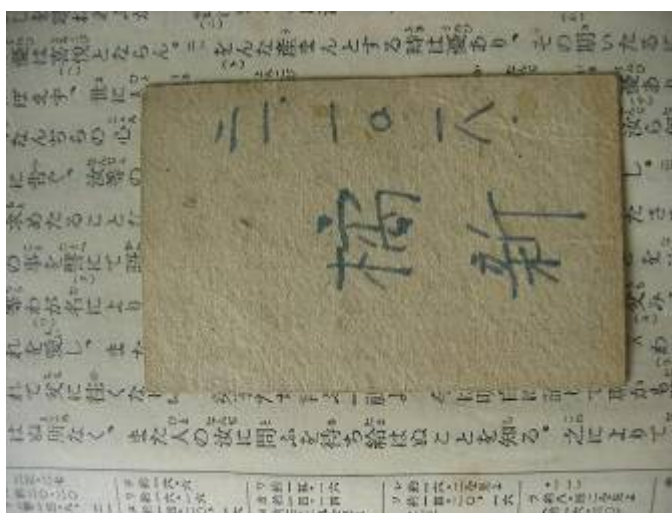
⁶⁾ 一方で、聖書を全掲載しつつ、それに適宜注釈を加えているタイプのものは、収録している。

る。上製本の表装がほとんど剥離してしまっているが、表紙を繰ると力強い墨書があらわれる。そこには、「涙とともに播くものは歓喜とともに穫らん・その人は種をたづさへ涙をながしていでゆけど禾束をたづさへ喜びてかへりきたらん」(詩篇 126 章 5・6 節)との、^{たちばな}橘新の山本兄あての献辞がある。橘新は、くり返しおこなっていた寄付や訪問などをおして、霊交会と親しい交わりのあった人物である。また、名宛人の山本兄は、三宅清泉(官之治)・長田穂波らとともに第二次世界大戦前の霊交会の屋台骨を支えていた山本徳太郎(ないし静雄)ではないかと推察される。つまり、さきの一節が献じられた 1937 年 2 月が、おそらくはこの聖書が橘によって山本に、すなわち霊交会にもたらされた時期とみることができるだろう。じつに刊行から 30 年ちかい歳月が流れていたことになる。

ではこの間、この聖書は一体どこでどのように扱われていたのか。その一端も、冒頭と末尾に所狭しと並ぶ寄せ書きから、うかがうことができる。前から順にみてゆくと、冒頭部分では黒崎幸吉(1932 年 9 月の墨書。以下同)・浅野猶三郎(1933 年 7 月)・塚本虎二(1933 年 7 月 28 日)・矢内原忠雄(1935 年 7 月)が、末尾部分では金澤常雄(1935 年 4 月)・上澤謙二(1935 年 10 月)・河辺貞吉(1936 年 4 月)・中川順助(1934 年 10 月)が、それぞれ筆をふるっている(揮毫写真後掲)。これらのいずれにも宛名はなく、また 1937 年よりも前の日付であることから、当時の所有者に宛てて記されたものと理解するのが妥当だろう。1937 年の贈り主が橘新であったこと、そして橘が霊交会訪問に際して、ときに黒崎幸吉や矢内原忠雄といった無教会主義キリスト教の面々と連れだっていたことを勘案するならば、当時の所有者は橘である可能性が高い。では、これらは一体どこで認められたものなのか。その答えも、寄せ書きのいくつかが教えてくれる。すなわち、塚本が「於信州軽井沢黙示録研究終了の日」と記し、矢内原が「富士山麓山中湖畔イザヤ書研究記念」と認めているように、無教会主義キリスト教が盛んに開催していた、各地での集会・礼拝や聖書研究会の場で寄せられたものなのである。そうして集められたメッセージが、橘を介して、霊交会に届けられたというわけである⁷⁾。

⁷⁾ もっとも、これらのメッセージが、はじめから橘を介して霊交会に届けられるものとし

ところで、当該聖書が霊交会にもたらされた時期を推定するうえで手がかりとなるのが、書きこみである。書きこみには年月日が含まれている場合もあり、それが最も古いのが、『引照 新約聖書 詩篇附』（No.28）ということになる。末尾部に「三宅」の署名とともに、「昭和二年五月十一日」と記されている。1926 年 8 月の刊行だから、一年と経たないうちに三宅の手に渡っていたことになる。またこの聖書には、「二一・一〇・一八、」という年月日とおぼしき数字の並びと、橘新の自署の入った聖書カード「正義」が挟みこまれている。「二一」を和暦と解釈すれば 1946 年。「義は国を高くし／罪は民を辱しむ」（箴言 14 章 34 節）とのメッセージはこの期におよんで意味深長だが、それはひとまずおくとして、三宅はすでに没（1943 年）しており、三宅の遺した聖書が、会でひき続き用いられていたであろうことが推察される。



て寄せられたかどうかは定かではない。ここでは結果として、メッセージが霊交会に届いたことに留意しておきたい。

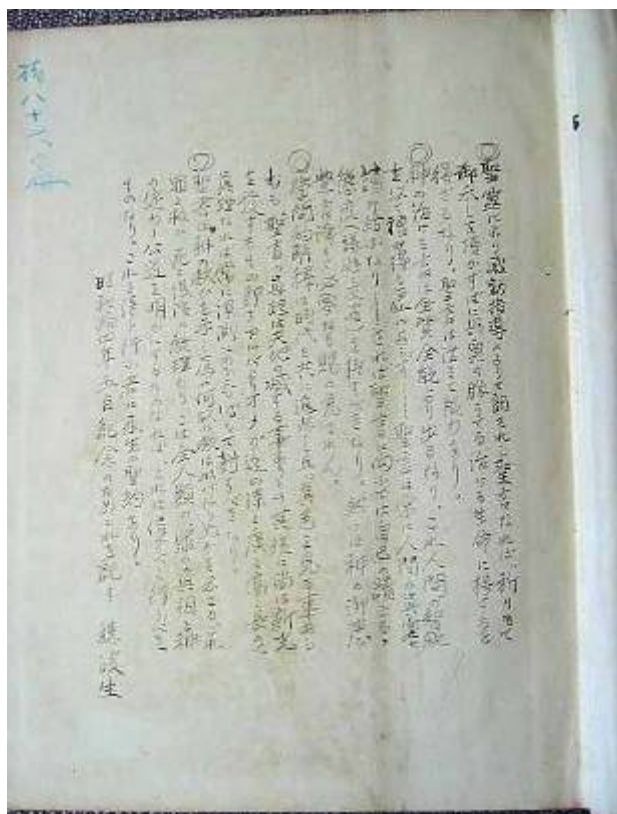
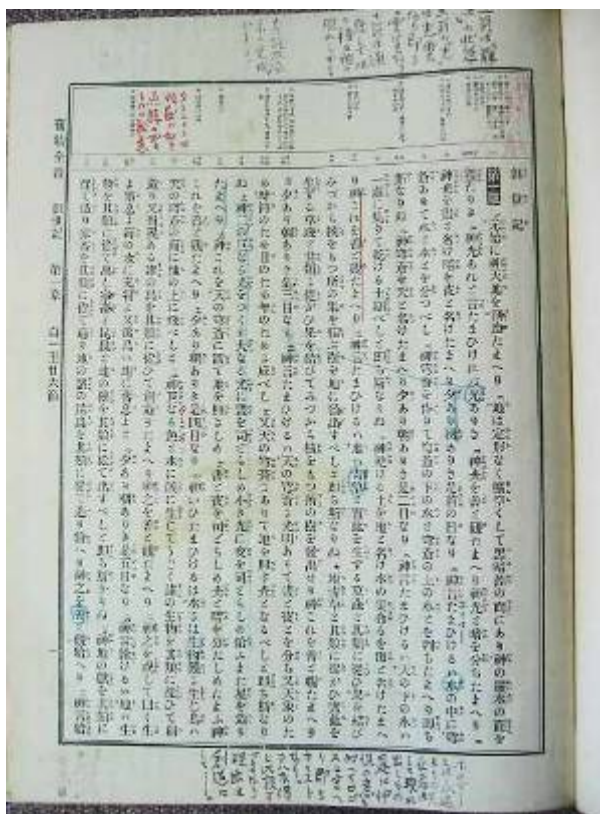


そのような意味でいえば、『聖書』(No.34) も興味深い。1955 年に発行されたこの聖書にはとくに書きこみはないが、当該書のもと思われる 1959 年 2 月 5 日付、日本聖書協会関西支社の石本俊市宛て納品・請求書が挟みこまれている⁸⁾。石本俊市は、戦前に三宅清泉や長田

穂波といった創設信徒たちと活動をともし、戦後には彼らの志を継いで霊交会を支えた“第二世代”の立役者ともいえるが、そんな彼の許に、クロスの表装が何か所にもわたって剥離しているこの聖書はあったのだろう。だが、そこに挟みこまれているのはそれだけではない。1972 年 3 月 26 日の「礼拝順序」を記したメモや、1979 年 10 月 26 日に没した、他ならぬ石本自身の会葬次第も挟みこまれている。聖書は、石本の没後も会堂にとどまり、志を継ぐものたちによって受け継がれてきたのだろう。霊交会にあって聖書は、誰かのものであると同時に、誰かひとりのものというわけでは、かならずしもなかった。



⁸⁾ 聖書と挟みこまれている納品・請求書に記されている聖書番号 (JC61) が一致することから、判断した。



三宅清泉とともに、霊交会の創設信徒として会をリードした長田穂波もまた、自らの筆跡、ひいては読みの痕跡を聖書に残している。蔵書印も兼ねた「香川県木田郡庵治村六〇三四ノ一／長田穂波」の青印がある『旧約聖書統篇』（No.45）には、赤色のペンや鉛筆による傍線・傍点・囲みなどが随所にみられる。また、『旧新約聖書』（No.46）には、「昭和拾四年五月記念のためこれを記す」として、長田の直筆で、「聖言」とは「生きて能力」のあるものであり、「常に人間の真奥を読」むものであるから、「常に深淵にのぞむ心」をもって対峙し、「これを信じ行ふ者に永生の聖約」がある、と記されている。長田の聖書と向きあう姿勢や心構えを表白したような書きこみである。そしてこの表白を実践するかのごとく、赤・青・黒のペンや鉛筆による傍線・傍点・囲み、さらには細かな文字での書きこみが、随所にみられる。

なる。神への奉仕のための団結を掲げて 1899 年に発足した同会に日本支部が設立されたのが 1950 年、以降さまざまな施設に聖書を配布するようになる。そうした対象施設ののひとつとして、ハンセン病療養所は意識されていたのである。

この例によらず、時代がくだるほど、島内外の個人や団体との行き来は活発になる。そのことは、聖書をとおしてもうかがい知ることができる。『新約聖書 新改訳 注・引照付』

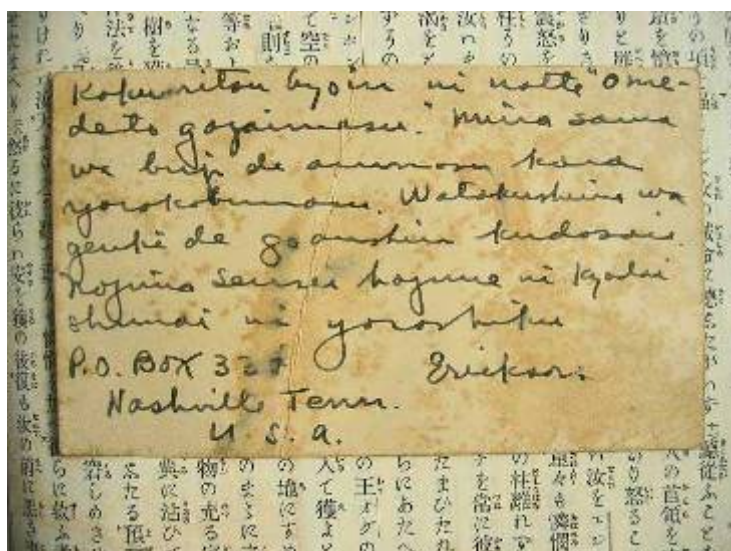
(No.25) には、河野進による手書きのカード「見舞」が貼りつけられている。「病には／天の使が／舞いおりたように／見えるんだな／だから／見舞っていうんだな」と記したその人は、賀川豊彦の勧めで慰問伝道をはじめ、長きにわたって霊交会に通い、礼拝を担当した岡山の牧師である。霊交会では、島外から訪れる牧師によって礼拝がおこなわれていたため、会員にとってもっとも近い島外者のひとりが牧師だったといえよう。また、霊交会の面会人宿舎である霊交荘の改装を祝して、大阪の清教学園から送られた聖書 2 冊

(No.73・76) も、霊交荘という交わりの場をめぐるものとして、島外との行き来がかたちとなったものと理解できる。一方、島内での行き来という点では、もうひとつのキリスト教会、カトリックの大島教会との関わりが透けてみえる。『新約聖書 詩篇つき』(No.42) に挟みこまれているカードには、「キリスト降誕 2,000 年／大聖年」のスタンプが押され、大島教会の線描画と「高松教区無原罪の聖母大島教会」の文字が浮かびあがる。わずか 10 年ほど前のものであるが、両教会の行き来を示すモノが限られている現状にあって、留意しておくべき 1 点といえよう。





長きにわたって大切に扱われ、読み継がれてきた聖書には、読み継がれてきた時間の長さの分だけ歴史が蓄積されている。その蓄積の、眼にみえるかたちのひとつが、挟みこまれているモノだということは、くり返すまでもないだろう。ここまで、いくつかの挟みこまれた



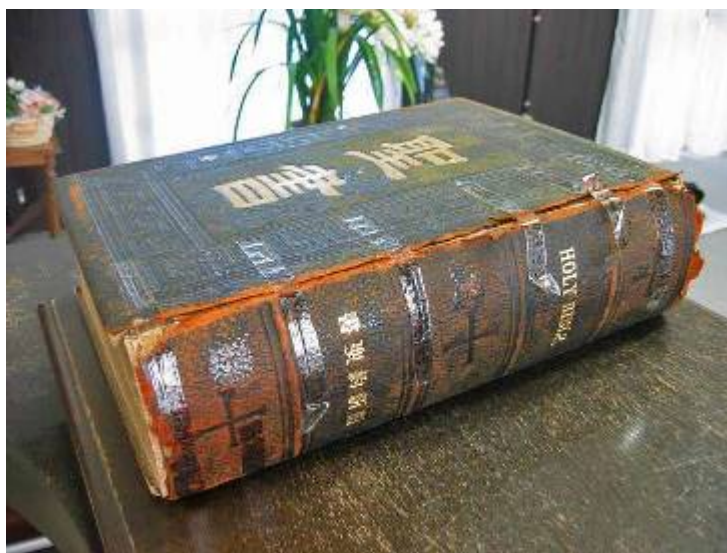
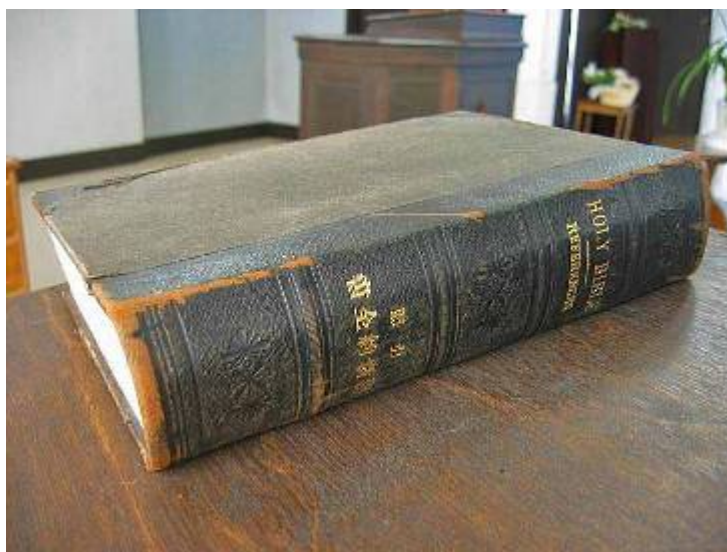
たモノを紹介してきたが、最後にいまひとつ、大切な 1 点を紹介しておきたい。さきにも採りあげた『引照旧新約全書』(No.40)の挟みこみ史料のなかに 1 葉の葉書がある。「高松市外大島／三ヤK様」「Miyake San／Reiko Kai」と宛名が併記された葉書の消印は WASHINGTON,D.C. 1941 年 10

月 11 日、差出人は Erickson とある。Erickson とは、草創期から霊交会を支えてきた宣教師の S.M.エリクソンで、時局が緊張感を増してゆくなか、1940 年の暮れに日本を離れ、アメリカに帰国していた¹⁰⁾。また「三ヤK」とは、三宅清泉のことである。ローマ字表記となっている葉書の内容は、「Watakushi wa Genki」といった近況報告が中心となっている。ここで注目されるのは、「高松市外」という空間認識もさることながら、「三ヤK」「Miyake San」といった表現から垣間見える、エリクソンの三宅に対する距離感の近さである。ふた

¹⁰⁾ 当該聖書には、年月日不明ながら霊交会一同あての軍事郵便も挟みこまれており、こちらからも時局を垣間見ることができる。

りは長田穂波らとともに、草創期の霊交会をそれぞれ宣教師・創設信徒として支えた間柄であり、エリクソンの帰国に際しては、惜別の情をあらわしていた¹¹⁾。そのエリクソンからの葉書は、ますます混迷の度を深める時局のなかで、どれほど大切なものと受けとめられたらうか。精神的な近さと物理的な遠さを抱えながら、1943・1946年に相次いで没したふたりは現在、記念碑のかたちで霊交会教会堂の前庭という空間に共存している。

現在、霊交会教会堂の礼拝堂には、2冊の大判の聖書がある。1冊は司会用机に備えられている *HOLY BIBLE REFERENCES* (No.80)、もう1冊は演壇に備えられている『旧新約聖書』(No.82)である。前者は、現存する聖書のなかで5番目に古い1912年のものだが、同時期に発行されたほかの聖書に比べると、状態はとてよくみえる。一方、表紙と背表紙のつなぎの部分がセロファンテープで補修されているなど、かなり使いこまれている感がある後者は、1925年の刊行だが、冒頭部分の書きこみから、1935年6月25日に神戸英国聖書協会から寄贈されたものであることがわかる。1935年は、霊交会にとって、



¹¹⁾ 長田穂波「エリクソン師を送る」『霊交』第265号(1940年12月10日)、三宅清泉「エリクソン御夫婦に送る」『霊交』附録(1940年12月10日)、『霊交』は霊交会機関紙(霊交会所蔵)。

現在の教会堂が竣工した節目の年にあたり、この聖書も 5 月の竣工をうけて寄贈されたものではないかと推察される。つまり、礼拝堂演壇の聖書は、現在の会堂とともに 75 年以上の歳月を大島でかさねてきたのである。

聖書は、クリスチャンにとって、教会にとって、欠かすことのできない大切な聖典である。それゆえ、持ち主が没しても受け継がれ、破損しても補修されて、長い歳月を教会とともに歩んできた。そこには、それぞれの時代の持ち主によって書きこみや挟みこみがなされ、そうした積みかさねのなかで、今日に至っている。聖書に蓄積された歴史は、文字どおり断片ではあるが、そのひとつひとつに触れ、その断片がかたちづくられる経緯やその断片に集約されたおもいを汲みとることによって、断片が像を結ぶことにもなるだろう。聖書もまた、霊交会に軸足を据えた歴史のテキストなのである。(石居)

†

鴨下重彦たちが編集した論文集『矢内原忠雄』を開くと、まず、冒頭 14 頁にわたって掲載されている 30 葉の口絵写真が目にとまる。そのうちの 1 葉に、「長島愛生園にて (1937 年)」とのキャプションがついた写真がある。いまも残る同園本館（現在の歴史館）まえでの集合写真には、園長の光田健輔とおもわれる人物、おそらくひとりの女性など、12 名が写っている。矢内原の活動の一端に、ハンセン病療養所でのそれがあるとしらせる構成をとった口絵写真の掲載である。

本書は大きく 3 部に分かれ、その「第 I 部「生涯」については単なる伝記的な記載の羅列ではなく、その生涯に様々な角度から光を当て、立体的に矢内原の人となりを伝えるような、メリハリのある内容とした」と、その構成のねらいが示されている。第 I 部の第 13 の節に、さきにふれた「ハンセン病療養所伝道」との題がつく（執筆は鴨下重彦）。その節の本文はちょうど 2 頁。書き出しは、「矢内原の伝道で、他の無教会伝道者にみられない、際立って特異なものの一つは、ハンセン病（ライ）療養所への伝道である」の 1 文。

ここには、矢内原による国立療養所長島愛生園への訪問のようすが記されている。

なお、矢内原の長島愛生園訪問では最後に患者、『嘉信』読者と一緒の記念撮影をした。その際、両脚切断、両眼盲で乳母車に乗って矢内原の隣に座った玉木愛子さんのことと、彼女の書いた句集の『真夜の祈り』と自叙伝『涙を吸うもの』の紹介は今井館で聞いたが、こちらも涙を飲む思いであった。

——さきにみた口絵写真に女性らしきひとが写ってはいるが、矢内原とおぼしき人物の隣ではないので、引用箇所という写真と口絵のそれとはべつなのだろう。また、細かなことをあげれば玉木の句集名の表記は「真夜の祈」（大浜書店、1954 年）¹²⁾であり、明らかな間違いを指摘すると彼女の著作に『涙を吸うもの』はない。『涙を吸ふ者』は藤本正高の著書（明和書院、1949 年）で、旧約聖書の「研究」「聖書講義」（同書序）である。玉木の「自叙伝」（同書跋文の長島愛生園医官塩沼英之助「生命の奇蹟」にいうところ）は、『この命ある限り』（保健同人社、1955 年）である。療養者にかかわる記述のこうした誤りを残念におもう。

なお、玉木の句集『真夜の祈』は、大浜書店の大浜亮一がのちにはじめた新地書房の創立 1 周年を記念して復刊された（1982 年）。その復刊版の書名扉の次頁にある口絵写真は、玉木と矢内原がふたり並ぶようすを写している。掲載にあたってこの写真にトリミング処理がおこなわれたかどうかは不明。集合写真の一部なのか、ふたりだけが被写体だったのかはわからない。腰かけ足を組む矢内原の隣に、乳母車体の籠に乗り、両目に眼帯をしている玉木がみえる。写真キャプションは、

1956 年（昭和 31 年）4 月 22 日 矢内原忠雄、東京大学総長として関西へ旅行した途次、長島愛生園に玉木愛子を見舞う。短冊はその席で揮毫して玉木に贈ったもの。イザヤ書 30 章 15 節のこの言葉は矢内原が最も愛用したものの一つ。

¹²⁾ 同書を国立ハンセン病資料館図書室で閲覧した。同館が所蔵する同書には、「愛生図書館蔵書」「国立療養所長島愛生園」と印刷されたうすい青色の帯がまかれ（印字部分は黒く塗りつぶされている）、また「国立多磨全生園／ハンセン氏病図書館蔵書」の蔵書印、「ハ氏病文庫蔵書」「国立療養所多磨全生園／患者自治会ハ氏病文庫／No. 号／48.11.12」の蔵書印、「ハンセン氏病図書館蔵書／No.R03-」の蔵書印が押印された頁がそれぞれある。発行所の大浜書店の所在地は東京都港区南佐久間町、発行者は大浜亮一。

と記されている。キャプションにいう短冊の写真がその左に掲載され、「汝ら立ちかへりて静かにせば救を得平穩にして依頼まば力をうべし 忠雄書」とみえる。さきにみた、靈交会教会堂にのこる聖書余白への揮毫と同じ聖書からの文言である。

さて論文集『矢内原忠雄』にもどろう。この節（「ハンセン病療養所伝道」）では、「矢内原の伝道で〔中略〕際立って特異なものの一つ」として、「ハンセン病（ライ）療養所への伝道」がとりあげられている。「長島愛生園にて（1937 年）」とのキャプションがついたさきの口絵写真の 1 葉も、彼の「特異なものの一つ」というわけだ。矢内原の「人となり」を「メリハリ」をつけてあらわそうとするとときに選ばれた 1 つである「ハンセン病（ライ）療養所への伝道」をめぐっては、ハンセン病療養所やハンセン病患者への矢内原たちの側からの接近、取り組みが記されている——「ハンセン病患者の巡礼の姿を見慣れており」、「聖書とライ病、私とライ病、イエスとライ病、ライ病でない人々に、などの項目で呼びかけている」、「将来はライ菌の研究をしてハンセン病療養所の医師になろうか」、「矢内原が国立療養所長島愛生園を訪問したときの話をしたことがある」、「患者や職員を激励する矢内原の愛と熱意に満ちた行動」、「矢内原は療養所にいる患者への支援と慰めに汗を流した」——というぐあいだ。

矢内原の「生涯」を記す論文集の 1 つの章なのだから当然といえるかもしれないが、また、伝道というものがもともとそうなのかもしれないが、彼のミッションについての記述は、ほぼつねに矢内原の側からの一方通行で、その相手のほうはというと、せいぜい写真撮影に玉木たちが園者が来たことくらいがとりあげられ、それが両者の交流ととらえられたにすぎない。ハンセン病療養所の療養者たちは、異例で希有な偉大である伝道の客体とのみみられているのだ。

だがたとえば、国立療養所星塚敬愛園で『野菊 矢内原忠雄先生とらい療養所』（井藤道子ほか編、野菊刊行会発行）という書籍が同園の看護婦たちによって 1965 年に編まれたことがあるとおり、矢内原の伝道への療養所からの応答はあった。そうしたテキストを参照して考察をくわえれば、矢内原の伝道をめぐるもっと「メリハリのある内容」を示せただ

ろう。(阿部)

†

矢内原に対する療養者からの応答にふれたのが、論文集『矢内原忠雄』第Ⅲ部「信仰」の第 3 の章「伝道・牧会者・聖書研究者」である（執筆は柴田真希都）。この章は、「矢内原を中心とする、戦時中の、聖書を介する多様な人間的交わりを確認」（傍点は引用者。以下同）する機会となった。「祈りの専門職である病者との交友」という見出しのもとで、

慢性的に病を負い臥床する人々は、戦時中、非生産的かつ非愛国的な輩として世間の厳しい目にさらされていた。その中でも矢内原がことさら愛を注いだのが、結核療養者、精神病患者、ハンセン病患者であった。

と矢内原の事績が示されている。彼が「祈りをとおして戦争を神の審判によってやめさせる」「祈りの伏兵」や「祈りの専門職」として病者をみたという、この病者観をめぐる当事者の側から矢内原への応答がまた示される。

その時まで全く生存価値も楽しみも希望もなくわたしは早く死んだ方がよいと考えていましたが、矢内原先生によって不生産者のわたしたちも「祈る」ということによってよい国民ともなり、国家へご奉公ができ、生き甲斐のある生涯をおくることができるのだ、と真に生きる道を教えられたのであります。

とのハンセン病の療養所在園者のことばが引用されている。出典は、『矢内原忠雄全集』第 13 巻月報に収録された、石本俊市「生きることを教えられて」と提示されている。この月報掲載稿からの引用をうけて本章の執筆者は、「矢内原の言葉を受容した人は、それまでの非生産的で無為な存在という外的なまなざしによる抑圧から一転、最も創造的で有意な存在へと自己認識を作り変える機縁を与えられたのである」との考察または理解を記した。

「祈りの専門職である病者との交友」という見出しのもとで、矢内原の伝道を好機とした病者の自己認識の転換を記した評伝執筆者は、石本が療養所在住者だとはわかっても（月報の各文章末尾には職業や所属や職名が記され、石本のそれは「大島青松園」となってい

て、読めばそこが「らい療養所」だとわかるが)、彼がなにをしてきた、どういった人物なのかは知らないのだろう。

なお、瑣末な揚げ足取りにみえるかもしれないが 1 つ指摘すると、癩そしてハンセン病を発症したもののたちのすべてが、「慢性的に病を負い臥床する」こととはならない。彼ら彼女たちは療養所内で生きてゆくために、さまざまな生産活動に従事した。床に伏してばかりいて日々を過ごしたわけではない。それでは療養所での生を生きぬくことはむづかしい。このことは、いくらかでもハンセン病の療養所を訪うて調査をすれば、容易にわかる。

石本の文章をみよう。執筆は矢内原歿後 2 年のときだというから 1963 年か。当時刊行中の『矢内原忠雄全集』(岩波書店、1963 年～1965 年)¹³⁾は、石本たちの手元に「新居浜市の T 氏からご寄贈下さいます」という。T 氏とは、矢内原と一しょに大島にわたったことのある ^{たちばなはじめ} 橘新である。石本は、矢内原の「らい療養所」訪問は、「おそらくわが大島青松園が最初であった」と推測した。石本が寄稿文に示したその訪島年月日は、矢内原みづからが記したそれと一致する¹⁴⁾。石本が月報原稿を記した時点では、矢内原の大島行記録を収載した全集の巻は刊行されていないから、石本自身がそれをきちんと記録していたか、島に残るなにかの記録をみたのだろう¹⁵⁾。いまでも大島在園者によって几帳面だったと回顧

13) 前掲鴨下ほか編『矢内原忠雄』の「はしがき」末尾に記された注記で『矢内原忠雄全集』全 29 巻の刊行年が「一九六三～六四年」となっているがそれは誤り。

14) 矢内原は逐次刊行物『通信』『嘉信』などに大島訪問のようすを記している(阿部安成「大島の生、島をめぐるレターズー香川県大島の療養所を場とした知の動態」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.109、2009 年 4 月、同「ゆくりなくも一国立療養所大島青松園キリスト教霊交会 2009 年 4 月・5 月調査報告」同前 No.113、2009 年 6 月、阿部、石居人也「無教会と愛汗ー大島青松園キリスト教霊交会の 2 つの精神」同前 No.121、2009 年 12 月、参照。本 Working Paper Series は滋賀大学経済経営研究所の HP などから WEB 上でも閲覧できる)。『嘉信』はいまも霊交会教会堂図書室にあり、そのうちの数冊には「大島青松園」「石本」の押印がある(前掲阿部ほか「無教会と愛汗」に目録掲載)。また橘の親族から霊交会に寄贈された文献や写真について前掲阿部「ゆくりなくも」に記した。

15) たとえば青松園内で編集、発行された総合誌というべき逐次刊行物『藻汐草』の第 4 巻第 6 号(1935 年 11 月)「所内日記抄」欄に「九月八日／東大矢内原教授来訪され経済学植民政策に関する講演あり」、同誌第 6 巻第 10 号(1937 年 10 月)「大島日誌」欄に「八月二十四日／東京帝国大学経済学部教授矢内原忠雄博士、愛媛県新居浜町橘新氏外、渡部美代治、三島甫、久保田力、矢内原伊作、靱山民子、細川敬一の諸氏来所す」と記録されている。この 2 回の矢内原来訪時の写真がさきに記した寄贈写真のなかにあった。同誌は発

される石本ならではの記述である。矢内原の大島行は、1935 年 9 月 8 日、1937 年 8 月 24 日、1944 年 5 月 19 日、1959 年 4 月 22 日の 4 回である。「そのうちの前の三回は先生にとってもっとも苦しい受難の時代でありました」と石本はおもいをめぐらした。

矢内原を苦しめた受難の時代は、療養者たちにとっても同様だったということなのだろう。石本は、「戦争へ戦争へと突進していた時代」には、「病弱者や老人たちは厄介者視され邪魔者あつかいをされ、ことにわたしたち病者はいたずらに国家の禄を喰む厄介者として礼遇されていました」と述べる。こうした「厄介者視」は療養所在園者たちをもいわば蝕み、戦時下は、

たしかに生きる価値も希望も歓喜もないわたしたち病者は早く死んだ方がかえって国家にも社会にもご迷惑をかけなくてすむことであり、これこそわたしたちの選ぶ道であり国家への真のご奉公ではなかろうか？など深刻に考えていた時

だったと当事者たちにも自覚されていた、と在園者たちの心情の一斑を石本は明かした。

「そうした時」に矢内原の訪島があり、彼による講演会があった。前掲の『矢内原忠雄』所収の 1 つの章「伝道・牧会者・聖書研究者」ではその概要が示され、そしてさきの引用箇所へと続く。矢内原自身が記したところでは、1959 年以外の 3 回の訪島において、彼は島で講演会をおこなっている。

『矢内原忠雄全集』月報掲載稿の筆者石本は、青松園の霊交会会員である。石本が矢内原に教えられた機会となったという講演会は、1935 年、1937 年、1944 年のいずれかのときのものとなる。石本はそれからおよそ 20 年ないし 30 年の年月を経たのちに、矢内原のことばを介して、生き甲斐のある生涯をおくることができる、真に生きる道を教えられた、と回想し、それを考察する研究者は、「無為な存在」と外部からみられていた療養者が、一転して、「最も創造的で有意な存在へと自己認識を作り変える」きっかけを、「与えられた」と記述したのだった。ここでも療養者は、矢内原が備える威徳の光被をうける客体あつかいである。

行されたそのすべての号が青松園の自治会で保管されている。

矢内原との邂逅以前の石本は、彼自身が記したとおり、「その時まで全く生存価値も楽しみも希望もなくわたしは早く死んだ方がよいと考えてい」たのか、研究者が分析したとおり、「非生産的で無為な存在という外的なまなざしによる抑圧」をこうむるものとしてのみあったのか。(阿部)

†

そうではない。

療養者たちにむけられた「非生産的で無為な存在という外的なまなざし」は、確かにあり、療養者のいくにんかはその「まなざし」を痛いほどに自覚していた。療養所に生きるものたちはその痛みに、おおまかにいうと 2 とおりの向きあい方を示したこととなる。その受容とそれへの対抗の 2 つである。

たとえば、前者については、青松園在住者による、「人間が働き得ると言ふ事ほど尊くも有難いことはない／情けない体になつて見ると能く解つて来る、働けないと言ふ事は凡ての消滅である」(穂波生「そくばくの言」『霊交』第 216 号、1936 年 11 月 10 日)、「目は見えず耳はきこえず、たゞ食ふだけの身になりはてた私は自分ながら犬や猫にも劣つた者に成つたやうに思はれます」(鈴木みよ「きゝがき」同前第 256 号、1940 年 3 月 10 日)という忍従や諦念や卑下のことばを拾いあげることができる¹⁶⁾。そうした発言をとおして、彼ら彼女たちは病むことにはじまる事態を、ひとまず、あるいは、つまりは、受け入れたのである。

そして後者がまた 2 つに分れる。その 1 つは、とくに「無為」との軽視に対して、もう 1 つは、とりわけて「非生産的」との貶視に抗うという対抗の術をわたしたちは考えることとなる。

香川県木田郡庵治村の大島に療養所が設置される根拠となる法が「癩予防ニ関スル件」

¹⁶⁾ ほかにも「死に損じのゴクツブシである」(「編輯後記」『霊交』第 225 号、1937 年 8 月 10 日)などの表現がある。

とその関連法で、それが施行された 1909 年に療養所も開設となった。その 5 年後に霊交会が組織される。結成 1 周年を期してつけられ始めた霊交会の日記には、

本会員ハ他より研究ニ来る人にはねんごろにお話しする事、しかし付合上手ハ言はぬ事ニ致し、何処迄も主を救世主として語る事、聖書は常に持参してはなさぬ事、又一日一回以上研究し、幾会も読むこと、常に祈り常に喜び常に感謝して暮らす事等を本会員に切望ス

と、会員であるための準則がその最初の頁に記されてあった（表題のないこの日記は霊交会所蔵）。もちろんここにあげられた事項は当為であって、霊交会会員のみながいつもこのとおりに暮らしていたわけではない。また、キリスト教への信仰や霊交会の結成の直接的きっかけも、無為との指弾にあったわけではないだろう。ただそうではあっても、祈り、喜び、感謝することをつねにこころがけて療養所で生きようとするものたちを、なにもしない無為のひととかたづけることはできない。霊交会につどったものたちは、「日曜日、水曜日、三大節（国祭日）」に聖集会を開いていた¹⁷⁾。

石本はまた、霊交会会員となって祈りのみの毎日をおくっていたわけではない。彼は、大島療養所で 1931 年に自治組織が結成されたとき、初代の総代に選出され、その翌 1932 年に創刊された謄写版刷りの機関紙『報知大島』第 1 号に、「祝発刊」と題した稿を寄せている（ただし署名は「石本俊一」。自治会機関紙『報知大島』は霊交会と大島青松園協和会（自治会）とが所蔵）¹⁸⁾。

石本はそこで現時を、「今や改革第三期ニ入り人心漸ク弛緩ヲ来タシ、自ラ惰眠ヲ催シ、島ノ空気亦何トナク沈静セル時」ととらえ、このときに創刊された逐次刊行物の『報知大島』の役割を、

島ノ諸問題ニ関シ慎重公正ノ態度ヲ取り、是ヲ是トシ非ヲ非トシ、正シキ輿論ヲ喚起シ、民衆ヲシテ其ノ適帰スル所ヲ知ラシメ、又進ンデ公益思想ノ進歩ヲ助ケ、以テ自治ノ発展ヲ計

¹⁷⁾ 霊交会会則による。会則についてはひとまず、阿部安成「楽しい赤裸の場所—大島療養所、長田穂波、情緒纏綿」（滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.135、2010 年 7 月）を参照。

¹⁸⁾ この『報知大島』は 2012 年 4 月にリプリント版が近現代資料刊行会から出版される予定。

リ公共事業ノ興起ヲ促スニアルコト

と確認して、「吾ガ島ノ先駆者」となることを同紙に期したのだった。

矢内原の訪島まえにすでに、療養者の生は無為ではなかったのだ。あたえまえのことだが。

霊交会の機関紙『霊交』をみてゆくと、戦時下の療養所に生きるものたちがみずからをどのようにとらえていたのかをあらわす記録にゆきあたることがある——「国家の時局益々困難、物資配給不足の今日、社会のために申訳なき存在」（「編輯後記」『霊交』第 258 号、1940 年 5 月）と自己の存在そのものを社会に対して陳謝するとともに、「病菌の為に倒されて無用の長物化しゝある者」（ほなみ生「国防と救癪問題」『霊交』第 264 号、1940 年 11 月）と、そうした療養者という自己を時局とのかかわりで、役にたたないものととらえる自己認識が表出されていたのだった。物資が不足するこのときにおいて、自分たちはなにも生みださず浪費するだけの邪魔ものだというのが。この「国防と救癪問題」と題された稿を執筆した療養者は、青松園でもっとも多くの方を書き、霊交会機関紙『霊交』の編集と発行を一貫して担った長田穂波である。

穂波のそこでの議論は、「いま国家の重大問題の一つ」が「人間資材」という観点かつ課題であり、それは国家の「総動員」という事態と連動していると現時をとらえたうえで、いかに「滅私奉公」を実現するかを問うている。論題にあるとおり、「国防」と「救癪」と「愛国運動」をどうやって連結させるかを、療養者として穂波は考える。しかも、「無用の長物化しゝある者」として。穂波は、「こゝ〔療養所〕に入所して＝＝散菌行為＝＝を為さざるは、期せずして愛国行為となる訳である」とひとり唱えた。療養者たちは、無用の長物との自己貶視にみずから抗おうとするとき、自分が療養所にいることをそのまま素直に受け入れ、その隔離の現状を愛国行為へと反転させたのだった。菌を撒き散らさないこと、すなわち、隔離という滅私が報国と愛国へと審級するというのである。

さきの引用に続けて穂波は、「これは誇るべきではないが日本人として深く自覚すべきと思ふ」と附記していた。ここにいう「日本人」とはだれか？——療養所に隔離された自分

たちもふくめて「日本人」を想定するのであれば、「愛国運動」を、期せずして、その末端で、担うものとして、「誇るべきではないが」との恥じいるようすもみせながら、戦時下における「日本人」というものに、ほんの少しでもなり得たとする自己実現の達成が小声で叫ばれていようし、また他方で、自分たち以外の、療養所の外にいる「日本人」をいうのであれば、療養者たちを排除しつつそれを忘れ、あるいはいくらかの憐憫や慈愛を施す弱者としてのみ想起する所外の「日本人」にむけて発信された小さな異議申し立てになるだろう。穂波の筆記は、わたしたちはここにいるがゆえに、あなたたちとともに国を愛し国に報いているのだ、とも、わたしたちがここにいるお蔭であなたたちは菌にさらされずに済んでいるのだぞ、ともとれる両様のことばの飛弾だった。

療養者の生は、みずからを役立たずと否定しかねない貶視に囲繞されていた一方で、そうした視線に抗い、それを撥ね退けようとするあらたな自己を彫琢しつつあったのだった。そのとき、戦争という事態が重要な梃子となっていた。

療養所に暮らすものたちは、「非生産的で無為な存在という外的なまなざし」を、いわばからだ全体に浴びるように生き、それをみずからの内に取り込んでしまうほどのいっそうの「抑圧」を生きていたのだといえる。そのときに、自己否定とさらなる自己実現とのあいだにあるいくつもの療養者たちの生を、わたしたちがいまどのようにとらえ考えるのかを示さなくてはならない。

†

ここでもういちど、論文集『矢内原忠雄』に収載された「祈りの専門職である病者との交流」の見出しにはじまる文章をみよう。戦時中に矢内原が「ことさら愛を注いだ」ものたちに「ハンセン病者」たちがいたとの指摘に続く箇所である。

矢内原の基準によると、国の現状を憂い、国家を神と結びつけ、その行く末を国際平和に資するように軌道修正していくことは愛国的行為であるとされたが、時局の抜き差しならぬ展開を前にしては、もはや祈りをとおして戦争を神の審判によってやめさせるしか道はないと

思われた。よって日常の雑事に追われず、祈ることを主たる活動とすることが可能な境遇にあると思われた彼ら病者こそ、矢内原が見出した「祈りの伏兵」であり、祈りの専門職なのであった。

ここにいう「彼ら病者」が、くりかえすと、「結核療養者、精神病患者、ハンセン病者」であり、「矢内原がことさら愛を注いだ」とみなされたものたちである。まず指摘しなくてはならないことは、戦時下のハンセン病者たちは、「日常の雑事に追われず」に過ごすことなどできなかった。これは戦時下にかぎられない。戦時であれ平時であれ、彼ら彼女たちの多くが、生きるために「日常の雑事」をみずからかたづけなくてはならなかったのだ。くわえて、「日常の雑事」もふまえてどのような自治を療養所に実現させるかが、彼ら彼女たちの課題であり、それに日々おわれていたわけではないにしても、「日常の雑事」と自治と日々を生きることが、療養所ではどれもつながっていたのだ¹⁹⁾。

さきの引用部の「祈りの伏兵」には後注がつき、石本が記録した矢内原の講演内容が示されている（時期は不明。正確には「次のような意味のことを語ったという」と紹介されている）。

この騒々しい気狂いじみた世の中にあって諸君こそ真に国家の前途を憂慮し、世界平和のために静かに祈ることができる場におかれている。またその祈りこそもっとも大切である。諸君にはまだ社会の誰にもできない尊い残された使命がある。祈りの伏兵としてこの所で熱心に祈っていただきたい

石本はこの講演内容の紹介に続けて、さきにみた「真に生きる道を教えられた」との確認を記している。療養者たちは、矢内原の教えにしたがって、世界平和のために祈る伏兵となったのだろうか。

石本も属した霊交会の機関紙『霊交』をみると、確かに信徒たちは「世界平和」「東亜平

¹⁹⁾ それを報せるテキストに、さきにふれた大島で発行された逐次刊行物の『報知大島』がある。その紙上にあらわれた自治の議論を、国立療養所大島青松園協和会（自治会）が発行する逐次刊行物『青松』で連載中の阿部安成「療養所の歴史を縁どる一過去との乱取り」で紹介している（同誌通巻第 647 号、2009 年 8 月、から始めた連載は同誌通巻第 663 号、2012 年 4 月発行予定、で第 17 回をかぞえる）。

和」「地上平和」の語をもちいて平和を願い、その実現を祈っていた。ただしこの祈りは、戦争を避け得ないことも同時に知ったうえでの祈願であった。また、大島の療養者が「伏兵」の語をもちいた文章もある。その一節を引用しよう。

国家の時局益々困難、物資配給不足の今日、社会のために申訳なき存在と存じますが、一面また療養所に居て癪根絶を希ふ生活を思ふて、いさゝか慰めて居ります（流浪して菌を散布せない点を）一層に祈りに精進して、皆様の御活動の伏兵たらむ事と願つて止みません。この引用箇所のまえには、「徒食の三十三年を恥かしく存じました。実に無用の長物であります」と、大島での療養所開設以来の歴史をふりかえるなかで自己を省みて、それを「無用の長物」とみせる感慨も記されていた（『編輯後記』『靈交』第 258 号、1940 年 5 月）。無為徒食、無用の長物とは、療養者自身の自覚するところでもあった。いま適切なテキストをもちあわせていないが、療養者にむけてそうしたことばが投げつけられたことは、いくらかでもあったことだろう。さきにみた穂波のペンによるコラム「国防と救癪問題」が掲載された『靈交』の発行は 1940 年 11 月のことだったから、ここに引用した「編輯後記」はそれよりも数か月まえの記事となる。署名のない「編輯後記」も穂波の執筆とみてよい。

穂波はこの年 1940 年に、くりかえし同じことばや表現法をもちいて、いわば隔離を裏返し、療養所という隔離の場を自己の生の拠点として据えようとする試みに腐心していた。3 年まえの『靈交』「編輯後記」に、

強国日本、一等国日本、東洋の盟主として祖国を愛します。それだけ広い襟度と、高い理想と深い信念とを、主張せざるを得ません。此処に編輯子の熱禱があります。

と記した穂波は、1940 年のこのとき、「一層に祈りに精進して、皆様の御活動の伏兵」であろうと願うのだった。ここにいう「伏兵」は、なにをあらわしていようか。

通例の辞書のうえでのその意味は、不意討ちのために隠した軍勢、あるいは、そこからくる喩えとして、予期しない障碍や競争相手を指す。穂波のいう「伏兵」とは、国防のため、救癪のため、東洋平和のため、国を脅かすもの、癪を蔓延^{はびこ}らせるもの、平和を侵すものと闘う、しかし、療養所のなかにとどまらざるを得ない、表^{おもて}にあらわれない、最前線に

は立つことのできない、隠れた兵ということなのだ。矢内原が講演したと石本が記録した、世界平和のために静かに祈る兵とは、その意味がおおきく異なる。少なくとも療養所にいる穂波（と石本も）と、東京帝国大学教授を辞任した矢内原とでは、開いた鋏のように、祈り、平和、伏兵の語に託した意味がだんだんと隔たっていったようにおもう。この隔たりが、療養所に暮した穂波の生の証^{あかし}である。祈りをとおしてよい国民となり国へ奉公をするとは、いくつもの苦悶があったにせよ、戦争遂行を支えることだった。穂波の語法は、その意味での「伏兵」である。（阿部）

†

ここで本書『矢内原忠雄』の第Ⅱ部「学問」をみよう。ここは 4 つの章にわかれ、題目と執筆者をあげると、「植民政策論・国際関係論」（木畑洋一）、「台湾との関わりー花瓶の思い出」（若林正丈）、「南洋群島研究」（今泉裕美子）、「植民地研究と〈植民〉概念」（塩出浩之）、となる。

矢内原は、台湾や南洋群島などの現地に実際に出かけ、また、「植民地支配のもとに置かれている人々への共感を基盤にすえながら、彼の植民政策研究を展開していくことになる」といわれる（木畑）。そのうえで、たとえば本書第Ⅱ部においては、植民化を文明化とみなす矢内原の植民論が問われることとなる。ここでの植民論を問う焦点は、南洋群島をめぐるのそれにあわされる。矢内原の南洋群島についての論考をめぐる近年の批判は、「矢内原が、戦前日本における日本の植民及び植民政策における「同化主義」の数少ない批判者であったこと、戦時に軍国主義批判を行って大学の職を追われ、しかしキリスト者、研究者として一貫した言動を保ったこと、などから矢内原の研究を肯定的に捉える評価を相対化する意味をもつ」と今泉はいう。現在において矢内原をいわばまるごととらえかえそうとするとき、彼の南洋群島をめぐる議論が重要な論点となるということだが、今泉はいくらかそれをずらして本書の議論を立てているとみえる。

この本書第Ⅱ部でわたしの気にとまった議論は、若林の論考である。章題に副えられた

「花瓶の思い出」は、矢内原の短文につけられた題「花瓶の思ひ出」に由来する。若林は、矢内原と台湾人林献堂との「交遊の姿を素描」することをとおして、「矢内原は日本現代史において、①批判的な日本植民政策・植民地研究、②戦前日本軍国主義批判（矢内原事件）、③無教会主義キリスト教信仰の宣教、④戦後の平和主義の提唱などの役割で知られているが、これらと台湾の現代史とがどうかかわるのか、林献堂の側から、もっと言えば植民地台湾人の側からそれを照射して、その一端を浮き彫りにしたい」と、自己の稿の課題を定めていた（ただし③はここではふれないという）。矢内原が実際に向きあった人びとから、矢内原が研究や調査の対象とした側から、矢内原そのものをとらえかえしてみようという試みへの意気を、わたしは感じた。

ただしここでの若林の試みは、十分に論述し得たのかというと、そうは読めなかった。同章第 2 節と第 4 節の副題がそれぞれ、「矢内原事件と林献堂」「戦後の林献堂と矢内原忠雄」となっているところにあらわれているとおり、それぞれの時代に林と矢内原をならべ照らしあわせて、両者の相違や対比の「一端を浮き彫りにした」というくらいだとわたしは読んだ。とはいえ、ここには、矢内原が駆使した学問や、そうした学問、調査、主義や主張、あるいは運動の主体としての矢内原を、その対象から問おうとする観点や課題がはっきりと掲げられていたことの意義はおおきいとおもう。かくある本書第Ⅱ部「学問」の一斑に示された姿勢は、他方で、本書第Ⅲ部「信仰」ではほとんどその論述に組み入れられはしなかった。

矢内原の伝道のその「特異」なようすが、彼が「ことさらに愛を注いだ」相手である「ハンセン病者」たちをとおして顕彰されても、その病者たちにとっての矢内原を、あるいは、その彼ら彼女たちからする矢内原の伝道の内実を検証することはなかったといつてよい。石本の回想にのみ拠って矢内原を讃えても、それだけでは参照すべきテキストとして不十分にすぎ、また限定されたそのテキストの読み方もけして充分ではないのである。

では、おそらく真摯な尊敬の意思をもって仰いだ矢内原の全集に寄稿した石本の文章をどのように読めばよいのか？、矢内原の療養所への伝道や、療養所におけるキリスト教信

仰をどのように考えるのか？といった問いに答えなくてはならなくなる。いまのわたしにその確かな用意があるわけではないが、石本の原稿を、おべんちゃらだとかリップサービスだとかいっても、なにもかたづきはしないとおもう。ただ、それは、見せかけの態度ということではない、はっきりとした姿勢や構えという意味でのポーズ（pose）ではあったと感じる。

それを議論するためには、癩そしてハンセン病の療養所が設置された大島におけるキリスト教信仰について、その一派としての霊交会について、その創始者のひとりである長田穂波と、彼よりも 1 つ世代を後にする石本俊市とについて、穂波や石本をそれぞれに軸とした大島における文芸や演芸について、などなどを論述しなければならない。いまはその余裕がない²⁰⁾。ただ、当面の議論にむけての展望を開くために、また、ここまで矢内原顕彰のありようを批評してきたその責の一斑を果たすためにも、かんたんに論点を提示しておこう。

法によって隔絶した場所とさだめられた療養所に生きるとき、それはいくらかのつながりが保たれたうえでの、療養者たちがいう療養所外の「社会」からの遺棄を意味していた。医療による治癒の手立てがない伝染病を病むことにより、社会から隔てられ劣位におかれて生きる多くのものにとって、そのための確かな証が必要となった。自分たちの肉体はともかくも、この生が、このいのちが意味あるものなのだと確かな実感がなくてはならない。そのとき、「癩者のために社会の開門してゐられるのが」宗教と文芸なのだとのとらえ方が療養者にはあった（「編輯後記」『霊交』第 243 号、1939 年 2 月）。宗教を生きようとするものたちには、世界と自分の肉体とがサタンとの戦場となるとの認識があり、さらには現時の戦争もがサタンとの闘いだを受けいれたとき、現実の強奪や殺戮を是とすることへの躊躇があったにせよ、聖戦をその末端で支えることとなったとみえる。

²⁰⁾ これまでわたしが書きたいくつもの稿を参照。とりわけ戦時下の療養所については、阿部安成「癩と時局と書きものを一香川県大島の療養所での 1940 年代を軸とする」（黒川みどり編『近代日本の「他者」と向き合う』解放出版社、2010 年）、同『『霊交』にあとがきを記す。一香川県大島の療養所をあらわす点描』（9）（滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.153、2011 年 8 月）、同（10 完）（同前 No.162、2011 年 12 月）を参照。

矢内原の大島訪問は、戦後の 1 回をのぞけばそれ以前は戦時下となる。その矢内原の全集刊行にさいして、そこにはさみこまれる月報への寄稿依頼は、(その経緯をまったく知らないが)、石本にはうれしいことだったろう。ただし月報原稿執筆は、矢内原を回想するとともに、戦時下の自分たちを回顧し検証する機会ともなった。大島から矢内原をふりかえるとき、『中央公論』に掲載された日本国家批判の稿が 1 つのきっかけとなって東京帝国大学教授を辞職することとなった矢内原、戦時下に島にわたり講演をおこなった矢内原を想起することとなる。石本が手にし得たなにかの記録か、あるいは、彼の胸のうちに残っていた「祈りの伏兵」の語がひとつかみされて、月報原稿に矢内原の講演のことはとして記された。このとき石本は、自分を審問することとなる——そのときの矢内原のことはを、自分たちはきちんと理解し受けとめていたのか?、と。

大島では、第二次世界大戦以前に、穂波ほどたくさんの文字を書き残したものはいない。石本はこと文筆にかんしては寡作だった。だから、さきにみた『霊交』紙上の「伏兵」の語は石本のことはではなく、また矢内原のそれとも無縁だといえるだろうか。石本も穂波とともに、大島の療養所にあるキリスト教霊交会という協同を生きていた。霊交会教会堂に残る機関紙『霊交』の束は、石本の整理によるとわたしはみている。石本は当然のこと、戦時下における霊交会の活動を熟知していたし、それを忘れてもいなかっただろう。矢内原全集月報寄稿原稿を書くという機会は、石本にとっては、1960 年代という戦後に、また、矢内原歿後に、戦時をふりかえるという自己審問の場となり、それを彼は、偉大なる矢内原顕彰という枠にあわせておこなってみせた。過去を現時にひっぱりだすとき、それは戦争という現時では否定されるべき過去であり、それをそのままに曝けだしたところでどうしようもないのであれば、いわば汚辱の戦時を、矢内原という強烈な孤高が発する光被に照らしてみせれば、全集月報への寄稿という責を十分に果たしたこととなる、とわたしはみる。

石本が嘘を書いたとか、自分たちにつごうよく過去を造形したとか、記憶が隠蔽されたなどといったのではない。わたしたちが、石本を、あるいは矢内原顕彰を吟味する眼が

あるかどうか、問われているのである。その意味で石本の、月報という全集の脇におかれたちいさな文章は、わたしたちの歴史意識を問う重い試金石だった。癪そしてハンセン病をめぐる療養所という過酷な環境を生き抜いたものの記したことがらには深い真実がある、とみるだけでは、いったん「過酷な」との形容を用いたにしてはみずからの知が柔^{やわ}であることを曝してしまったにすぎないとおもう。彼ら彼女たちのことばをそのまま受け入れろといっているのでもなく、そのことばが本当か嘘か、正しいか間違っているのかを精査しろといいたいのでもない²¹⁾。わたしの構えは、そう複雑ではなく、当事者のことばをできるだけきちんとその当時の状況に位置づけ、それを考察しようとするわたし（たち）の現在と思索にあたっての道具立てをあらためて考えよう、と示しているにすぎない。

†

本稿冒頭で紹介した矢内原の献辞である書き込みがある聖書にもどらう。この聖書には、くりかえせば、複数のひとによる書き込みがある。矢内原以外のものによるそれらをみると、まず表紙見返しの見開き 2 頁には、

詩一二六 五―六／涙とともに播くものは歓喜とともに穫らん・その人は種をたづさへ
涙をながしていでゆけど禾束をたづさへ喜びてかへりきたらん・／一九三七年二月／橘
新／山本兄

があり（本稿 3 ページに写真掲載）、つぎの見開き 2 頁には、

私の聖書扉にある先生達の御揮毫

世に勝つ者は誰ぞ・／イエスを神の子と信ずるものに非ずや／一九三二年九月 黒崎幸
吉

純潔第一／一九三三年七月 浅野猶三郎

視よ、われ速かに到らん／この書の預言の言を守る者は幸福なり、／一九三三年七月二

²¹⁾ 当事者のことばをどう聞くかについては、阿部安成「だって、当事者がそう言うものですからーハンセン病療養所における聞き取りの手立て」（滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.142、2010 年 2 月）を参照。

十八日／於、信州軽井沢黙示録研究終了の日／塚本虎二
があり、そのつぎの頁がさきにみた矢内原の書となる。

そして奥付のあとの余白頁にも、

ニチエウガクカウヘユクモノハテンゴクヘユキマスネ／当地日曜学校幼稚科さほたとほ
る君／召される数日前語りし語、／この語はその母を信仰に導き S.S.教師を励したり、
信仰より出でて／信仰に進ましむ／一九三五年四月 金沢常雄／終まで堪え忍ぶ者は／
救はるべし／一九三五年十月／上沢謙二

宜しく聖霊に／満たさるべし／一九三六年

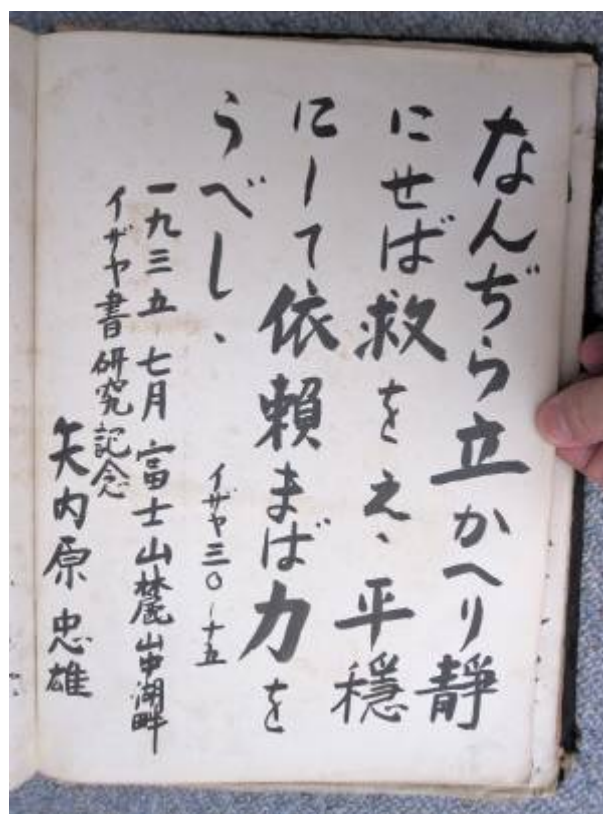
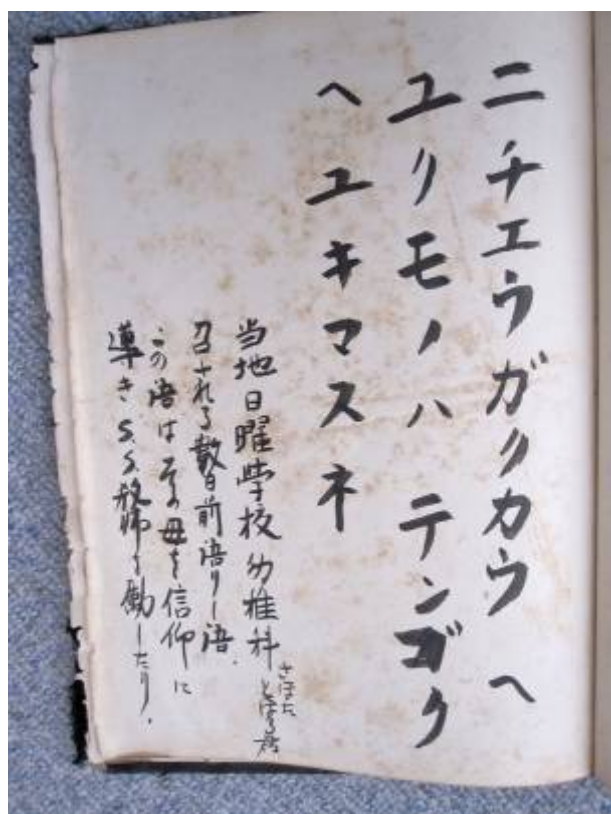
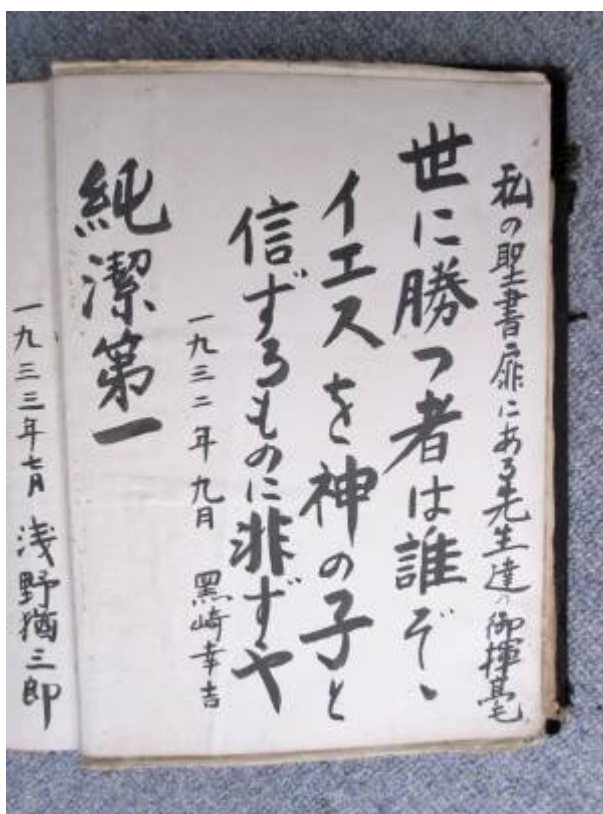
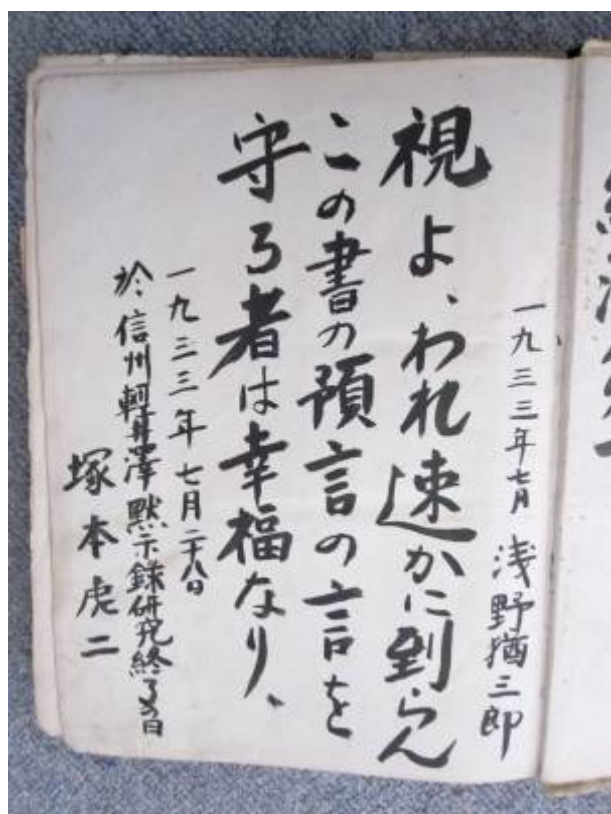
四月 河辺貞吉

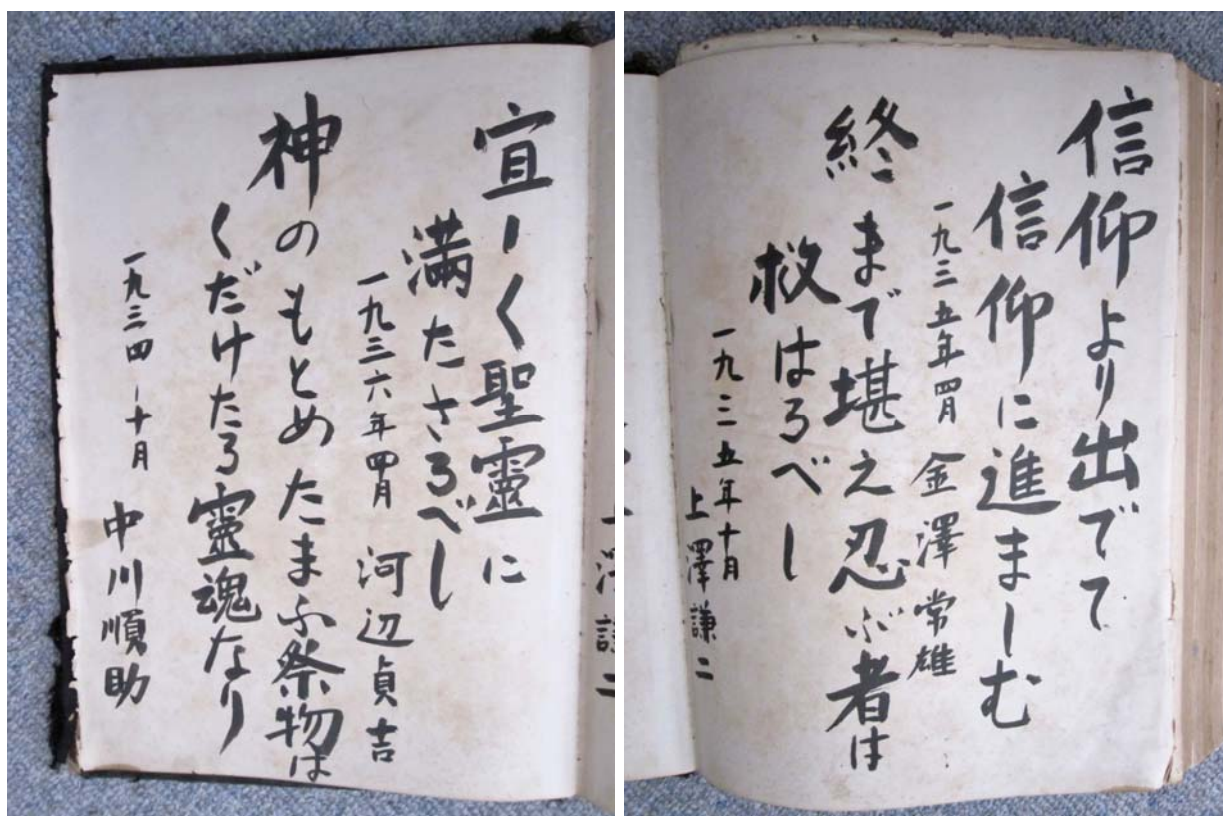
神のもとめたまふ祭物は／くだけたる靈魂なり／一九三四年一十月／

中川順助

——そこに記された名は、浅野猶三郎、上沢謙二、金沢常雄、河辺貞吉、黒崎幸吉、さほ
たとほる、橘新、塚本虎二、中川順助、矢内原忠雄、山本兄の 11 名である。彼らの署名が
あるこの聖書は、おそらく橘の持ちものであり、それにいくにんかが献辞を記したのちに
橘から青松園在住者の霊交会会員である山本に寄贈されたのだろう。夭逝したさほたとほ
るは、大島の日曜学校（SS）生徒だったのだろう。

冒頭で見たこの聖書に記された矢内原の献辞は、『真夜の祈』復刊版の口絵写真にあった、
玉木に矢内原がおくったという短冊への揮毫とおなじイザヤ書の一節だった。こうした揮
毫のある聖書が療養所内に残っていることは、そこが予防法によって隙間なく閉ざされき
ってしまった空間ではなかったことをあらわしている。べつなところでも書いたとおり、
療養所に生きた当事者たちがそこを「隔絶」の場所と実感したことは事実だとしても、外
部のわたしたちもまたそのとおりに療養所のようすをなぞってしまったのでは、それは、
癪そしてハンセン病をめぐる療養所について考えたことにはならないと、わたしはおもう。
「隔絶」の場所にたぐり寄り、そこに少しずつ隙間をこじ開けてゆくときの大切な手立て
が、こうした療養所に残るものなのだとおもう。





†

東京大学出版会のホームページをみると、「書評掲載書」の欄に『矢内原忠雄』があり、『朝日新聞』2011 年 12 月 25 日朝刊の「今年の 3 点」欄で、辻篤子によって同書がとりあげられたと紹介されていた²²⁾。ごく短文の評には、「東京大学の初代教養学部長、総長として「日本人の知と心の再建を担った」。没後 50 年、その軌跡をたどる意味は大きい」とあった。紙面をみると、短評冒頭の「人の知恵が問われている年末にひもときたいのが(3)だ」と、同書を指し示す文言があったが、WEB 転載にあたってはこれが省かれていた。「人の知恵が問われている年末」の文言が意図するところはかならずしも明瞭ではないが、「年末」の 2 文字をのぞくと、「ひとの知恵が問われている」との文言は、本書にふさわしいとおもった。もちろん矢内原の「軌跡をたどる意味は大きい」。そのたどり方の「知恵が問わ

²²⁾ 2012 年 3 月 23 日に閲覧した時点でもまだ HP に掲載されていた。また同日に CiNii で検索したところ同書の書評はヒットしなかった。

れている」はずなのだ。矢内原の「伝道」をどうたどるかには、まだまだ「知恵」をはたらかせる余地がたくさんある。

また、かつては橘の手元にあり、いまは霊交会教会堂にある、矢内原が揮毫した聖書に見えるほかの筆の使い手たち——黒崎幸吉や塚本虎二たちについては、まだまだ療養所とのかかわりで考察された例はほとんどない²³⁾。

すくなくともわたしが訪ねた 10 の国立療養所にはすべて宗派はともかくもキリスト教の教会があった。おそらく、癩そしてハンセン病をめぐる 13 の国立療養所のすべてに教会があるだろう。それらの教会のなかで、教会堂にある聖書の目録がつくられた例は、1 つとしてないとおもう。石居のおこなった目録づくりは、国立療養所内の教会における初めての試みとなり、それがここにまとまった（後掲）。すぐに役に立つ目録ではないかもしれない。癩そしてハンセン病への関心が薄まっているようにみえる現在、さらに療養所内での信仰が研究の対象になることもほとんどないようだ。だが、目録を功利のある道具としてのみみる必要もないだろう。この聖書目録は、研究者に便宜を提供するためにつくったのではなく、青松園の霊交会にかかわったひとたちが実際にそれに手をふれた痕跡が残る固有資産（property）の台帳である。聖書は訳文の違いがあっても、中身はどれもおなじだといえる。この目録では、「書き込み」「備考」の欄を設け、そこに記された情報によって、その聖書がどのように使われていたのか、だれとだれの手を経てここにある聖書なのか、そうした聖書の書史についての一端があらわれるようにした。これはたんなる遺産目録ではない。なかにはいまも日曜日ごとに手にとられている聖書もあるのだから。目録も 1 つの史誌となり得るのである。

＊

その後、やはり新聞報道で、本書編者のひとりである鴨下の訃報に接した（『朝日新聞』2012 年 1 月 21 日夕刊）。医学と小児科学専攻という故人との面識はわたしにはまったくな

²³⁾ 黒崎の最新評伝に、阿部博行『黒崎幸吉—生涯とその時代』（東北出版企画、2011 年）がある（未見）。

く、まるで知らないひとの冥福を祈るなどお為ごかしのようにいやだが、可能性としてあったかもしれない議論ができなくなってしまったことが惜しまれる。さきに記したとおり、鴨下は矢内原の療養所訪問を本人から聞いたという。矢内原も黒埼も塚本も、実際に大島を訪ねていた。熱心な信徒に、ちいさな島での忘れられかねない信仰がどのように映るのか、お話をうかがいたかった。



（附記。2012 年 3 月 23 日） 3 月 10 日に 3 か月ぶりくらいの間を空けて大島へわたった。もうすぐリプリント版が刊行される史料集への写真の提供と揮毫のお願いが目的の 1 つだった。後日、とてもよい題字原稿をいただいた。同封された紙片に「良く書けませんでした、御免なさい」とあった。いいえ、とてもよい書です、ありがとうございました。

本稿冒頭に記したとおり、勢い込んで執筆し始めた本稿は、2011 年内に発行する予定だった。おもいのほか、時間がかかってしまった。老化は否めない。

（写真キャプション） 3 ページ：目録 No.40 揮毫／5 ページ上：目録 No.28 三宅官之治署名、同中・下：目録 No.28 橋新カード／6 ページ上：目録 No.43 石本俊市会葬次第、同下：目録 No.45：長田穂波印／7 ページ左：目録 No.46 長田穂波書き込み、同右：目録 No.46 長田穂波手稿／8 ページ上：目録 No.27、同下：目録 No.27 挟み込み葉書表／9 ページ：目録 No.42 大島教会カード／10 ページ上下：目録 No.40 挟み込みエリクソンからの葉書／11 ページ上：目録 No.80、同下：目録 No.82／30～31 ページ全：目録 No.40 揮毫／33 ページ左：ある日曜礼拝の朝、霊交会教会堂玄関（2010 年 8 月 15 日）、同右：題字揮毫。

No.	書名	形式	編・訳者名	発行者	発行所	発行地	発行年月	初版年月	書きこみ	備考	位置
1	新約聖書と詩篇 讃美歌つき	B6判 新約聖書と 詩篇、讃美歌合本	—	—	財団法人日本聖 書協会(聖書部 分)	東京都中央区銀 座4丁目5番1号 (聖書部分)	1982年	—	—	「祝敬老」との金字型押し のある日本基督教団銀座 教会の葉(1992年)1枚、 イースターカード1枚、が 挟みこまれている	図書室書架
2	聖書		—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀 座4丁目2番地	1961年	—	—	旧約聖書:1955年改訳 新約聖書:1954年改訳	図書室書架
3	我らの主・救主イ エス・キリストの新 約聖書	小形新約聖書 (口語)	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀 座4丁目5番1号	1995年	—	—	表紙に「国際ギデオン協 会より贈呈」「看護婦」との 金字印刷あり	図書室書架
4	新約聖書	小形新約聖書 (口語)	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀 座4丁目5番1号	1969年	—	—	1954年改訳	図書室書架
5	新約聖書 詩篇つ き	小形7ポイント活字 口語新約聖書 詩 篇つき	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀 座4丁目2番地	1961年	—	—	1954年改訳 表紙に「国際ギデオン協 会より贈呈」との金字型押 しあり	図書室書架
6	新約聖書 詩篇つ き	小形7ポイント活字 口語新約聖書 詩 篇つき	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀 座4丁目2番地	1961年	—	—	1954年改訳 表紙に「国際ギデオン協 会より贈呈」との金字型押 しあり	図書室書架
7	新約聖書 詩篇つ き	小形7ポイント活字 口語新約聖書 詩 篇つき	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀 座4丁目2番地	1962年	—	—	1954年改訳 表紙に「国際ギデオン協 会より贈呈」との金字型押 しあり	図書室書架
8	新約聖書 詩篇つ き	小形7ポイント活字 口語新約聖書 詩 篇つき	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀 座4丁目2番地	1962年	—	—	1954年改訳 表紙に「国際ギデオン協 会より贈呈」との金字型押 しあり	図書室書架
9	新約聖書 詩篇つ き	小形7ポイント活字 口語新約聖書 詩 篇つき	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀 座4丁目2番地	1962年	—	—	1954年改訳 表紙に「国際ギデオン協 会より贈呈」との金字型押 しあり	図書室書架
10	新約聖書 詩篇つ き	小形7ポイント活字 口語新約聖書 詩 篇つき	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀 座4丁目2番地	1962年	—	—	1954年改訳 表紙に「国際ギデオン協 会より贈呈」との金字型押 しあり	図書室書架
11	新約聖書 詩篇つ き	小形7ポイント活字 口語新約聖書 詩 篇つき	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀 座4丁目2番地	1962年	—	—	1954年改訳 表紙に「国際ギデオン協 会より贈呈」との金字型押 しあり	図書室書架
12	新約聖書 詩篇つ き	小形7ポイント活字 口語新約聖書 詩 篇つき	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀 座4丁目2番地	1962年	—	—	1954年改訳 表紙に「国際ギデオン協 会より贈呈」との金字型押 しあり	図書室書架

13	引照 旧約全書／ HOLY BIBLE REFERENCES.	—	—	ヘンリー・ルーミ ス(神奈川県横浜 市山手町223番 地)	聖書館	神奈川県横浜市 山下町60番地	1900年2月15日	—	随所に黒・赤・青ペンなど による書きこみあり	冒頭部に消印と抹消印あり 1932年クリスマスの墨書 葉(朱印あり)1枚、天沼定 久(ホーリネス教会四国明 星団)の名刺、百間町ライ オン館・宮脇開益堂の葉 (1930年5月8日)、墨書葉 (朱印あり1枚、朱印なし1 枚)、青ペン書き葉(1929 年1月5日)、が挟みこま れている メモ(黒ペン2枚、青ペン1 枚)が貼りこまれている	図書室書架
14	口語 新約聖書	小形 7ポイント活 字 口語 新約聖書 目録番号 JC240	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀 座4丁目2番地	1954年	—	「一九五四年七月三十日 ／柏井忠夫」との黒ペン 書きあり	クリスマスカード(浮田幸 子)1枚、葉(日本基督教 団出版部)1枚、が挟みこ まれている	図書室書架
15	口語 新約聖書	小形 7ポイント活 字 口語 新約聖書 目録番号 JC240	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀 座4丁目2番地	1954年	—	「一九五四年七月三十日 ／柏井忠夫」との黒ペン 書きあり	望みの会(滋賀県近江八 幡局区内八幡町近江兄弟 社内)の1953年カレンダー つきカードが挟みこま れている	図書室書架
16	口語 新約聖書	小形 7ポイント活 字 口語 新約聖書 目録番号 JC240	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀 座4丁目2番地	1955年	—	「贈、霊交会／一九五五・ 七・十一／崔[木達]俊」と の黒ペン書きあり	1954年改訳	図書室書架
17	新約聖書	小形 7ポイント活 字 口語 新約聖書 目録番号 JC240	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀 座4丁目2番地	1955年	—	「贈、れいこう会／一九五 五・七・十一／崔[木達] 俊」との黒ペン書きあり	1954年改訳 聖書カード1枚が挟みこ まれている	図書室書架
18	新約聖書 詩篇つ き	小形 7ポイント活 字 口語 新約聖書 詩篇つき 目録番 号 JC344	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀 座4丁目2番地	1959年	—	—	1954年改訳、末尾に「折 原」の朱印あり	図書室書架
19	新約聖書 詩篇つ き	小形 7ポイント活 字 口語 新約聖書 詩篇つき 目録番 号 JC344	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀 座4丁目2番地	1955年	—	冒頭部に「教会用／No.1」 との黒ペン書きあり	1954年改訳、冒頭部に 「霊交会」の青印あり、表 紙に「国際ギデオン協会よ り贈呈」との金字型押しあ り	図書室書架
20	新約聖書 詩篇つ き	小形 7ポイント活 字 口語 新約聖書 詩篇つき 目録番 号 JC344	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀 座4丁目2番地	1955年	—	—	1954年改訳、「父なる神」 と墨書された葉1枚が挟み こまれている、表紙に「国 際ギデオン協会より贈呈」 との金字型押しあり	図書室書架
21	新約聖書 詩篇及 箴言付／我らの主 なる救主イエス・キ リストの新約聖書 改訳	—	—	—	財団法人日本聖 書協会	東京都中央区銀 座4丁目2番地	1954年12月30日 (5版)	1952年12月15日	—	表紙に「日本国際ギデオ ン協会より贈呈」との金字 (推定)型押しあり	図書室書架

22	新約聖書 英和対照／THE NEW TESTAMENT IN ENGLISH AND JAPANESE	中形 8ポイント活字 英和対照新約聖書 目録番号 JR253D1	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀座4丁目2番地	1955年	—	—	表紙に「日本国際ギデオン協会より贈呈」(一部推定)との金字(推定)型押しあり	図書室書架
23	新約聖書 口語訳／THE NEW TESTAMENT In Colloquial Japanese	—	渡瀬主一郎・武藤富男共訳	佐藤忠勝(キリスト新聞社代表者)	キリスト新聞社	東京都千代田区神田錦町1丁目6番地	1953年2月10日(3刷)	1952年12月25日	—	—	図書室書架
24	我らの主なる救主イエス・キリストの新約聖書(引照附)全二十七巻	—	大正六年改訳委員訳	松井米太郎(日本聖書協会代表者)	日本聖書協会	神戸市神戸区加納町4丁目5番新三宮ビル	1936年5月10日(5版)	1924年6月20日	—	「聖書の道しるべー幸福になる手引ー」(日本聖書協会)が挟みこまれている	図書室書架
25	新約聖書 新改訳注・引照付	—	新改訳聖書刊行会訳	—	日本聖書刊行会(いのちのことば社発売)	東京都新宿区信濃町6	1965年11月12日	—	—	河野進「見舞」を青ペン書きした紙片が貼りつけられている紙片1枚が挟みこまれている	図書室書架
26	新約聖書 英和対照／THE NEW TESTAMENT IN ENGLISH AND JAPANESE	中形 8ポイント活字 英和対照新約聖書 目録番号 JR253D1	—	—	日本聖書教会	東京都中央区銀座4丁目2番地	1955年	—	—	冒頭部と末尾に「霊交会印」の青印あり 表紙に「日本国際ギデオン協会より贈呈」との金字(推定)型押しあり	図書室書架
27	THE HOLY BIBLE	—	—	関休(京城府鍾路2丁目92番地 英国人)	大英聖書公会	京城府鍾路2丁目92番地	1935年2月15日(再版)	1930年9月20日	冒頭部ほかに黒ペンによるハングルの書きこみあり	ハングル版 絵葉書(ハングルが書かれた霊交会礼拝堂2枚、英語が書かれたATLANTIC CITY のCLARENDON HOTEL1枚)、黒ペン・黒鉛筆によるハングルの書き込みがある便箋2枚・原稿用紙1枚が挟みこまれている 中扉・末尾ほか数ヶ所に「大島霊交会蔵書印」の朱印あり	図書室書架
28	引照 新約聖書 詩篇附／我らの主なる救主イエス・キリストの新約聖書 改訳 引照付	—	—	エフ、パロット(英国人)	英国聖書協会	兵庫県神戸市江戸町95番屋敷	1926年8月20日(初版)	—	末尾に「昭和二年五月十一日／三宅」との墨書あり、随所に赤鉛筆・黒ペンによる傍線あり	「ニー、ー〇、ー八、／橘新」との青ペン書きのあるカード1枚、青ペンによる記入のある絵葉書1枚、青ペンによる記入のあるメモ用紙1枚、聖書カード2枚および「霊交会歌」の印刷された用紙1枚が挟みこまれている	図書室書架

29	新約聖書 改訳 五号活字 総金巾／NEW TESTAMENT R.V. Five Type, Cloth.／我らの主なる救主イエス・キリストの新約聖書 改訳	—	—	エフ、パロット(英国人)	英国聖書協会	兵庫県神戸市江戸町95番屋敷	1926年3月10日(再版)	1924年6月20日	—	葉(英国聖書協会)1枚が挟みこまれている	図書室書架
30	新約聖書 詩篇附／我らの主なるイエス・キリストの新約聖書 改訳	—	—	ヂ、エチ、ヴァイナル	英国聖書協会	兵庫県神戸市江戸町95番屋敷	1934年6月28日(4版)	1924年6月20日	末尾に「大島霊交会／日野新之助」との黒ペン書きあり 赤鉛筆による印あり	紙片1枚が挟みこまれている	図書室書架
31	引照 旧新約全書／HOLY BIBLE REFERENCES.	—	—	エフ、パロット(英国人)	大英国・北英国聖書会社	兵庫県神戸市京町24番屋敷	1904年3月31日	—	—	冒頭部と中扉に「大嶋日曜学校」の朱印あり	図書室書架
32	引照 旧新約全書／HOLY BIBLE REFERENCES.	—	—	エフ、パロット(英国人)	英国聖書会社	神戸市江戸町95番屋敷	1912年4月1日(4版)	1904年3月31日	—	「被服支給申請票」(12年4月15日、大西熊次)が挟みこまれている	図書室書架
33	旧新約聖書 文語訳	大形文語聖書	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀座4丁目5番1号	1995年	—	—	—	図書室書架
34	聖書	大形 10ポイント活字 口語 聖書 目録番号 JC64	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀座4丁目2番地	1955年	—	—	「讃美歌 聖句索引」、財団法人日本聖書協会関西支社の石本俊市あて「案内状」(聖書の納品・請求書、1959年2月5日)、手書きの「礼拝順序」(1972年3月26日)、「故 石本俊市兄／協和会々葬 式次第」のプリント1枚、葉(「愛は誇らず—コリント十三・四／六九・五・十七 志村」の墨書、ヨハネ15・4「こうこ」の朱印各1枚)が挟みこまれている	図書室書架
35	我らの主・救主イエス・キリストの新約聖書	小形新約聖書(口語)	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀座4丁目5番1号	1995年	1954年	—	表紙に「国際ギデオン協会より贈呈」「看護婦」との金字印刷あり	図書室書架
36	我らの主・救主イエス・キリストの新約聖書	小形新約聖書(口語)	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀座4丁目5番1号	1995年	1954年	—	表紙に「国際ギデオン協会より贈呈」「看護婦」との金字印刷あり	図書室書架
37	我らの主・救主イエス・キリストの新約聖書	小形新約聖書(口語)	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀座4丁目5番1号	1995年	1954年	—	表紙に「国際ギデオン協会より贈呈」「看護婦」との金字印刷あり	図書室書架
38	我らの主・救主イエス・キリストの新約聖書	小形新約聖書(口語)	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀座4丁目5番1号	1995年	1954年	—	表紙に「国際ギデオン協会より贈呈」「看護婦」との金字印刷あり	図書室書架
39	我らの主・救主イエス・キリストの新約聖書	小形新約聖書(口語)	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀座4丁目5番1号	1995年	1954年	—	表紙に「国際ギデオン協会より贈呈」「看護婦」との金字印刷あり	図書室書架

40	引照 旧新約全書 ／HOLY BIBLE REFERENCES	—	—	エフ、パロット(兵 庫県神戸市江戸 町95番屋敷 英国 人)	大英国・北英国 聖書会社	兵庫県神戸市江 戸町95番屋敷	1908年1月15日 (再版)	1904年3月31日	冒頭部に橋新の山本兄あ て墨書(1937年2月)、黒崎 幸吉(1932年9月)、浅野 猶三郎(1933年7月)、「信 州軽井沢黙示録研究終了 の日」の塚本虎二(1933年 7月28日)、「富士山麓山 中湖畔イザヤ書研究記 念」の矢内原忠雄(1935年 7月)の墨書あり 末尾にさほだとほる君の 語、金澤常雄(1935年4 月)、上澤謙二(1935年10 月)、河辺貞吉(1936年4 月)、中川順助(1934年10 月)の墨書あり 赤鉛筆・赤ペンによる傍 線・書きこみあり	紙片、葉(押し花)、集合 写真、葉書(エリクソンより 三宅あて、1941年10月11 日)、軍事郵便葉書(奥村 竹一より霊交会一同あ て、年月日未詳)、絵葉書 2枚(宛名面貼りつき、 BRIDAI VEIL FALLS “OVOCAL”, WAR MEMORIAL BLDG, AND STATE CAPITAL— NASHVILLE—TENN.— 40)が挟みこまれている	図書室書架
41	聖書	大型 10ポイント活 字 口語 聖書 目録 番号 JC64	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀 座4丁目2番地	1956年	—	—	中身がセロテープで補修 されている	図書室書架
42	新約聖書 詩編つ き	聖書 新共同訳— 新約聖書詩編つき	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀 座4丁目5番1号	1988年	—	「芝清美様／訪問を感謝 して、石川一男／＊ ＊ ＊ ＊[抹消]／海老名民喜／ 一九八八、一〇、一六」と あり	末尾に「結婚記念／1988 年9月13日／小山栄一・め ぐみ」の印刷あり 手製カバーつき 葉3枚(ヘブル人13・25「こ うこ」朱印、詩篇33／12 「宏」朱印、詩篇46・1金字 型押し各1)・カード2枚(う ち1枚には「高松教区無限 罪の聖母大島教会」の朱 印あり)・「霊交会歌」のブ リントが挟みこまれている	図書室書架
43	新約聖書 1954年 改訳	大形新約聖書 詩 篇つき(口語)	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀 座4丁目5番1号	1976年	—	—	永谷園の東西名画選カー ド・浮世絵カード各1枚が 挟みこまれている	図書室書架
44	新約聖書 英和对 照／THE NEW TESTAMENT IN ENGLISH AND JAPANESE	中形 8ポイント活 字 英和对照新約 聖書 目録番号 JR253DI	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀 座4丁目2番地	1955年	—	「教会より送られる／そが のかづみ」の書きこみあり	表紙に「日本国際ギデオ ン協会より贈呈」との金字 (推定)型押しあり	図書室書架
45	旧約聖書続篇(ア ボクリファ)	—	旧約聖書続篇翻 訳委員訳(代表 者 エス・エチ・ニ コルス 東京市麻 布区材木町24)	シ・エチ・エバンス (東京市小石川 区茗荷谷町96)	聖公会出版社	東京市麻布区材 木町24	1934年2月15日	—	随所に赤ペン・赤鉛筆によ る傍線・傍点・囲みあり	冒頭部と末尾ほか随所に 「大島霊交会蔵書印」、末 尾に「香川県木田郡庵治 村6034-1／長田穂波」の 青印あり	図書室書架

46	旧新約聖書／THE HOLY BIBLE IN JAPANESE	—	—	松井米太郎(兵庫県神戸市神戸区江戸町95番 日本聖書協会 代表者)	日本聖書協会	兵庫県神戸市神戸区江戸町95番	1934年1月25日	—	穂波生(長田穂波)による「昭和拾四年五月記念のため」の黒ペンによる書きこみあり 随所に赤ペン・赤鉛筆・青鉛筆・黒ペンによる傍線・傍点・囲み・書きこみあり	紙片が挟みこまれている	図書室書架
47	新約聖書 詩篇つき	小形7ポイント活字 口語新約聖書 詩篇つき	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀座4丁目2番地	1962年	—	—	1954年改訳 表紙に「国際ギデオン協会より贈呈」との金字型押しあり	図書室書架
48	我らの主・救主イエス・キリストの新約聖書	小形新約聖書(口語)	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀座4丁目5番1号	1995年	—	—	表紙に「国際ギデオン協会より贈呈」「看護婦」との金字印刷あり	図書室書架
49	旧新約聖書 引照附	中形 9ポイント活字 文語聖書 引照つき	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀座4丁目2番地	1964年	—	末尾に「Saturday May 22, 1965/by Shokichi Hayashi/¥3,500」とのペンによる書きこみあり	「日本共産党香川県委員会／県常任委員／山本繁」の名刺が挟みこまれている	図書室書架
50	THE NEW TESTAMENT AMERICAN STANDARD VERSION AND JAPANESE COLLOQUIAL VERSION BILINGUAL EDITION／新約聖書 米国標準訳 日本語口語訳 対照	小形6ポイント活字 英和対照 新約聖書 目録番号 JC-R 223DI	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀座4丁目2番地	1962年	—	—	冒頭と末尾に「霊交会印」の青印あり 表紙に「国際ギデオン協会より贈呈」との金字型押しあり	図書室書架
51	THE NEW TESTAMENT AMERICAN STANDARD VERSION AND JAPANESE COLLOQUIAL VERSION BILINGUAL EDITION／新約聖書 米国標準訳 日本語口語訳 対照	小形6ポイント活字 英和対照 新約聖書 目録番号 JC-R 223DI	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀座4丁目2番地	1962年	—	—	冒頭と末尾に「霊交会印」の青印あり 「讃美歌 新旧番号対照表」および「280/514/260/541」と書かれたメモが挟みこまれている 表紙に「国際ギデオン協会より贈呈」との金字型押しあり	図書室書架

52	THE NEW TESTAMENT AMERICAN STANDARD VERSION AND JAPANESE COLLOQUIAL VERSION BILINGUAL EDITION／新約聖 書 米国標準訳 日 本語口語訳 対照	小形6ポイント活字 英和対照 新約聖 書 目録番号 JC-R 223DI	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀 座4丁目2番地	1962年	—	—	冒頭と末尾に「霊交会印」 の青印あり 表紙に「国際ギデオン協 会より贈呈」との金字型押 しあり	図書室書架
53	新約聖書 1954年 改訳	小形新約聖書(口 語)	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀 座4丁目5番1号	1969年	—	—	—	図書室書架
54	新約聖書 1954年 改訳	小形新約聖書(口 語)	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀 座4丁目5番1号	1969年	—	—	—	図書室書架
55	新約聖書 1954年 改訳(推定)	小形新約聖書(口 語)(推定)	—	—	日本聖書協会 (推定)	東京都中央区銀 座4丁目5番1号 (推定)	1969年(推定)	—	—	包装されたまま 表に「鈴木さん」とのペン 書きあり 書誌情報はすべて推定	図書室書架
56	新約聖書 詩篇つ き	小形 7ポイント活 字 口語 新約聖書 詩篇つき 目録番 号 JC344	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀 座4丁目2番地	1955年	—	—	1954年改訳 表紙に「国際ギデオン協 会より贈呈」との金字型押 しあり	図書室書架
57	新約聖書 詩篇つ き	小形 7ポイント活 字 口語 新約聖書 詩篇つき	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀 座4丁目2番地	1959年	—	—	1954年改訳 聖書・キリスト教関連地域 の地図(裏に鉛筆書きのメモ あり)、「献金／大阪平 井和雄様100円」と書かれ たメモ(「霊交会役員選挙 投票用紙」の裏紙)、注文 カードが挟みこまれている	図書室書架
58	大活字新約聖書 (上・下)	大活字新約聖書 (口語)―2分割製 本	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀 座4丁目5番1号	1983年	—	—	2分冊箱入り	図書室書架
59	大活字旧約聖書 (上)	大活字旧約聖書 (口語)	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀 座4丁目5番1号	1983年	—	—	2分冊箱入り	図書室書架
60	大活字旧約聖書 (中)	大活字旧約聖書 (口語)	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀 座4丁目5番1号	1983年	—	—	2分冊箱入り	図書室書架
61	大活字旧約聖書 (下)	大活字旧約聖書 (口語)	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀 座4丁目5番1号	1983年	—	—	2分冊箱入り	図書室書架
62	新約聖書 詩篇つ き	中形新約聖書 詩 篇つき (口語)	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀 座4丁目5番1号	1982年	—	—	1954年改訳	図書室書架
63	聖書 口語訳	大型聖書(口語)	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀 座4丁目5番1号	2000年	—	—	旧約: 1955年改訳 新約: 1954年改訳 売上カードが挟みこまれ ている	図書室書架

64	新約聖書 詩篇つき	小形 7ポイント活字 口語 新約聖書 詩篇つき 目録番号 JC344	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀座4丁目2番地	1955年	—	—	1954年改訳表紙に「国際ギデオン協会より贈呈」との金字型押しあり	礼拝堂机
65	聖書 口語訳	大型聖書(口語)	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀座4丁目5番1号	2000年	—	末尾に「武田ノ二〇〇一年四月」とあり	「讃美歌における不快語の読み替えについて」および礼拝プログラム8枚が挟みこまれている	礼拝堂机
66	聖書 口語訳	大型聖書(口語)	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀座4丁目5番1号	2000年	—	末尾に「愛唱歌ノ355番ノ276ノ530ノ310ノ404ノ」受洗年月日1964年十月一三日ノ平成13年3月18日購入ノ横田道代」などの青ペンによる書きこみあり	イースターカード(未記入1枚、高松教会より横田道代あて4枚、横田道代あて1枚)、売上カード(聖書・讃美歌各1枚)、聖画カード2枚、クリスマスカード(高松教会より横田道代あて2枚、高松教会より横田あて1枚、未記入1枚)、葉1枚、団扇(小豆島素麺わかさぎ屋)1枚、が挟みこまれている	礼拝堂机
67	新約聖書 詩篇つき	小形新約聖書 詩篇つき(口語)	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀座4丁目5番1号	1981年	—	—	1954年改訳表紙に「故 飯久保鎮雄記念ノ一九八二年一月一六日」との金字型押しあり	礼拝堂机
68	聖書 新共同訳	聖書 新共同訳	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀座4丁目5番1号	2000年	—	—	葉(日本聖書協会)1枚が挟みこまれている	礼拝堂机
69	新約聖書 詩篇及箴言付ノ我らの主なる救主イエス・キリストの新約聖書改訳	—	—	—	財団法人日本聖書協会	東京都中央区銀座4丁目2番地	1954年12月30日(5版)	1952年12月15日	—	聖書カード1枚、葉(日本基督教団出版部)1枚、が挟みこまれている 表紙に「日本国際ギデオン協会より贈呈」との金字(推定)型押しあり	礼拝堂机
70	聖書 引照つき	中形 7ポイント活字 口語聖書 引照つき	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀座4丁目2番地	1960年	—	—	—	礼拝堂机
71	聖書 新共同訳 旧約聖書続編つき	聖書 新共同訳— 新約聖書詩編つき	共同訳聖書実行委員会訳(推定)	—	財団法人日本聖書協会	東京都中央区銀座4丁目5番1号	1987年	—	—	葉(日本キリスト教団名瀬教会第一種建設記念、1980年6月15日)1枚が挟みこまれている イザヤ書41に付箋が貼られている	礼拝堂机
72	新約聖書 共同訳	—	共同訳聖書実行委員会訳(推定)	—	財団法人日本聖書協会	東京都中央区銀座4丁目5番1号	1978年10月(1版2刷)	1978年9月	—	読者カード1枚、葉(財団法人日本聖書協会)1枚、写真(岡山・マキノカメラでのプリント)1枚、が挟みこまれている	礼拝堂机

73	聖書 新共同訳	聖書 新共同訳	共同訳聖書実行委員会訳(推定)	—	日本聖書協会	東京都中央区銀座4丁目5番1号	2007年	—	冒頭部に「祝霊交荘改装／二〇〇七・六・七／清教学園中高等学校／霊交会御中」との墨書あり	—	礼拝堂机
74	新約聖書 共同訳	—	共同訳聖書実行委員会訳(推定)	—	財団法人日本聖書協会	東京都中央区銀座4丁目5番1号	1978年10月(1版3刷)	1978年9月	—	葉(Switzerland)1枚、売上カード1枚、が挟みこまれている	礼拝堂机
75	聖書 1955年改訳	小形 7ポイント活字 口語 聖書	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀座4丁目2番地	1961年	—	ヨハネによる福音書15の一部に赤ペンによる傍線あり、他所にも黒ペンによる印あり	—	礼拝堂机
76	聖書 新共同訳	聖書 新共同訳	共同訳聖書実行委員会訳(推定)	—	日本聖書協会	東京都中央区銀座4丁目5番1号	2007年	—	冒頭部に「祝霊交荘改装／二〇〇七・六・七／清教学園中高等学校／霊交会御中」との墨書あり	—	礼拝堂机
77	新約聖書 詩篇つき	中形新約聖書 詩篇つき (口語)	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀座4丁目5番1号	1985年	—	—	—	礼拝堂机
78	聖書	大型聖書(口語)	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀座4丁目5番1号	1978年	—	—	葉(財団法人日本聖書協会、関西フランク・グラハム フェスティバル各1枚)、紙片1枚、が挟みこまれている	礼拝堂司会机
79	新約聖書 詩篇つき	小形 7ポイント活字 口語 新約聖書 詩篇つき 目録番号 JC344	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀座4丁目2番地	1955年	—	—	表紙に「国際ギデオン協会より贈呈」との金字型押しあり 1954年改訳	礼拝堂司会机
80	HOLY BIBLE REFERENCES／参照 旧新約全書	—	—	エフ、パロット(神戸市江戸町95番屋敷 英国人)	英国聖書会社	神戸市江戸町95番屋敷	1912年4月1日(4版)	1904年3月31日	—	金森通倫著「聖霊の力 基督教綱領トラクト第九」(1923年5月1日再版、福音書館)が挟みこまれている	礼拝堂司会机
81	我らの主・救主イエス・キリストの新約聖書	小形新約聖書(口語)	—	—	日本聖書協会	東京都中央区銀座4丁目5番1号	1995年	—	—	表紙に「国際ギデオン協会より贈呈」「看護婦」との金字印刷あり	礼拝堂演壇
82	旧新約聖書／THE HOLY BIBLE IN JAPANESE	—	—	—	英国聖書協会	兵庫県神戸市神戸区江戸町95番屋敷	1925年12月10日	—	冒頭部に「昭和十年六月二十五日／神戸英国聖書協会寄贈」との墨書あり	左の墨書と同ページに「大島療養所印」の朱印あり 表紙裏に「日本聖書事業奉仕三十一年／昭和九年十二月末日永眠／故エフ、パロット氏記念／神戸英国聖書協会」との金字印刷のある黒紙が貼られている セロファンテープで補修されている	礼拝堂演壇